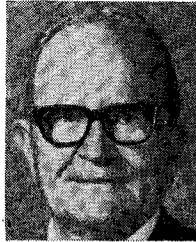




心の糧

十二使徒評議員会補助

セオドア・M・バートン



1月のこよみ

- 5日
1831年ミズリー州において、最初のインディアンのための伝道部開設さる。
- 7日
1876年メキシコ伝道部へ初の伝道宣教師着任。
- 8日
1805年オルソンハイド コネチカット州オクスフォードに生まれる。
- 14日
1847年ブリガム・ヤング、モルモン大移動の啓示を受ける。
- 18日
1827年ジョセフ・スミス、エマ・ヘイルと結婚する。
- 19日
1827年聖徒らにノーブー神殿建設の命が与えられる。
- 22日
1854年タヒチ伝道本部、デビッド・O・マッケイにより献堂さる。
- 27日
1852年モルモン経ハワイ語に翻訳さる。

私は現在のこの世界に最も必要なもの一つとして、一致を強調したいと思う。人類を平和へと導ぼうとする場合に、このことは一般社会のみならず教会内においても重要なことである。

不和、衝突の原因は何であろうか。原因は様々であるが、根本的な原因の一つは人間自身の自我である。私はこの自我を、自分を他の人と異なった人間であると認められたいという願望であると定義づけたい。この願望それ自体は悪いものではない。実際正しい方向へ導くならば、徳となり得るものである。成功し幸福な人々はみな、心の中にある程度の信念や誇りを持っているに違いない。ただ自我が利己主義へと発展する時に私たちは注意しなければならない。人が自分の尊厳に関して押しつけがましくなったり、自分自身のことを極端に持ちだす時、自我は有害なものとなる。人が会話を独占しようとしたり、他人の意見を無視する態度を示したら気をつけなさい。高慢で他人よりぬきん出ようとする人は、極めて危険な状態にある。

このような気持は利己主義から、またイエス・キリストの真の精神に欠けることから生じると思われる。

私たちは不和、衝突に満ちた世に生きているが、世俗的な生き方をする一団に加わる必要はない。また加わるべきではない。

— も く じ —

罪のゆるし	第一副管長	ハロルド・B・リー	1
宣教師の役目を果たす日曜学校		ゴードン・B・ヒンクレイ	3
真実を真実なものとする		ローレンス・R・フレイク	6
みたまは証す		ボイド・K・パッカー	9
迷える人々を捜す	第二副管長	N・エルドン・タナー	12
借物の光では耐えられない		ヘンリー・D・テイラー	16
正直と高潔		デルバート・L・スティプレー	18
什分の一の話		スペンサー・W・キンボール	21
特別なくつ			23
ノルウェーから来たカーステン			25
エライジャと紅海とあなた		ジョン・H・バンデンバーク監督	29
ポール・H・ダン長老との質疑応答		ポール・H・ダン	31
義を愛す		マービン・J・アシュトン	35
結婚は永遠に存続すべきと定められた		ジェームズ・A・カリモア	39
あなたはどこへ行こうとしているのか		リチャード・L・エバンス	42

表紙の説明

昨年の8月27日から29日にわたり、イギリスのマンチェスターにおいて、最初の地区総大会が開催された。今月の表紙は英国の歴史的な地を撮ったものである。表紙は最初のバプテスマが行なわれたプレストン市近郊を流れるリブルツの写真であり、裏表紙は、上から、1837年宣教師が最初に伝道した市場、北アイルランドのベルファストにおける街頭伝道、メイフラワー号が出航したヨークシャー州バトリーのブリガム港の写真である。

聖徒の道

1972年1月20日発行
 発行人 マービン・S・ハーディング
 発行所 東京都港区南麻布5-8-10
 末日聖徒イエス・キリスト教会
 電話(442)7459
 印刷所 太陽印刷工業株式会社
 定価 100円
 予約 一年間 1,000円
 外国 4ドル50セント



罪人の ゆるし

第一副管長

ハロルド・B・リー

実 際に罪からのがれおさせた罪人などいるであろうか。おそらく皆さん方が考えておられるこのような罪人とは、必ずしも正直に働かず、あるいは不当な手段で金をもうけているにもかかわらず、ぜいたくかつ安楽に暮らしている独立心旺盛な人のことであろう。このよう人は、教会役員として教会の責任にとまなう困難な問題にあれこれと心を悩ますよりも、また安息日を聖く過ごすよりも、むしろ日曜日をゴルフに興じたり、野球の試合や、競馬に行ったりして過ごすのである。すなわち、彼は什分の一あるいは教会の建築資金・福祉資金に払うことのできる金の一部を使って、興味ある所へと長い時間をかけて遊びに行くのである。彼には自分を犠牲にしてまでも教会の責任を果たす時間はないのである。また物欲に固執している世俗的な仲間と交わっているために、飲酒やかけごとに対して何のためらいも感じないのである。教会を離れている仲間

から不道徳なことを見のがしてもらったとしても、福音の標準に照らし合わせるならばそれは敢然と非難されるであろう。

同様に、そのような人の家に住んでいる女性、すなわち彼が自分の妻と呼んでいる女性は、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ」(創世1:28)という第一の戒めを全く無視しているということであらう。彼女は自分自身は教会にとどまることができない者であって、つまるところ宗教や教会といったものは貧しい人々や、純粋な人々のものであると自分に言い聞かせて、良心を慰めているのである。夫の財産を自由に使うことにより、妻は家庭の主婦としての責任をのがれることができる。それで、彼女は日々の生活がたいくつなものにならないようにするために、教会の教えに反するということを全く、あるいはほとんど無視して、酒やたばこにふけるブリッジパーティーに興じるのである。彼女は流行の先端をいく最も高価な衣装を身にまとうことができる。また、子供たちのことに関してあれこれ心配することもなく、一家をあずかる主婦として隠しおおせないような生活のしみをつけることもないのである。

あなたがたは、主の戒めにさからっている罪人たちがうわべだけ成功している光景を見る時、人生全体あるいは目的に対する正しい見方が欠けているために、先に述べたような生活の方が良いものであると考えるかも知れない。あなたがたは以上のような生活と比較してみて、教会に活発な生活をするのが容易なことではないと考えるかも知れない。教会で活発であるには絶えず制約と束縛につきまといわれ、時間と能力と金銭とを要求される奉仕と

犠牲を払い、自己を信じる標準以下の行動をする時心に不安を感じると考えるかも知れない、あなたがたは宗教以外の事柄に力を注げば大きな報いもたらされると考え、宗教は何も良いことをする力のない人々のために残しておくべきであると考えているかも知れない。しかし、あなたが人生の進路に関して最終的な決定をくだす前に、私はあなたがたが高い次元に立って物事の真理を理解するよう望んでいる。

肥沃な土壌に植えられた親木がなければ、また雑草が抜き取られ、耕作され、灌漑が行われなければ、美しく甘美な果物は実らない。これと同様に徳、純潔、正直、節制、高潔、貞節という甘美な実は福音が真理であるというゆるぎない証を持ち、主イエス・キリストの生涯と使命に対する確固たる証に基づいた生活をしていない者の中には育たないのである。真に義なる者となるために、私たちは日々罪を悔い改めて、自分の性格の悪の芽を日々つみ取る必要がある。

人の欲求を満足させるために、悪や誤ちをおおい隠して着飾らせる計画を企てた者はだれか。地球が創造される以前天上で戦いが起こった時、霊界において神の息子であったルシフェルは、死すべき肉体を持つ人間に努力や選びにかかわりなく救うという条件で神の栄光と誉れを自分の身にうけるように要求し、その計画を神のみ前に示した。一方救い主エホバの計画は地上でどのように生活するかを自分で決定する選択権を与え、すべては天父なる神の栄光と誉れに帰するという計画であった。そして、エホバの計画が受け入れられ、サタン計画は退けられたのである。

ここで、神が本当に子供たちを愛しておられるならば、なぜ神はサタンが人を誘惑し、誘惑によって人が死すべきこの世にあって最もすばらしい経験

を得る機会を失いかけたり、また神のみ前で永遠の生命を享受する特権を危うくするのを許しておられるのであろうか。という疑問があなたがたにあることだろう。偉大な予言者であり教師であるリーハイによってその答えが与えられている。

「それであるから、主なる神は随意に行なう自由を人間に許したもうた。しかし人間はもしあれ（悪）に誘われこれ（善）に誘われなければ、随意に選り行なうことはできないのである。」（Ⅱニーファイ 2：16）

しばらくこのことについて考えてみたい。善に対立するものがなければ、自由意志や選択する権利を用いる機会があるだろうか。この特権を否定することは人が知識を得、経験し、力を得て成長するという機会を否定することであろう。神は、人が罪を恐れ、真理と義務の道を歩むように、刑罰を伴う律法を与えられた。（アルマ42：20参照）

善と悪を選ぶ権利があるために、主は道に迷った人々が立ち帰ることができるようにその方法を備えられたのである。

悔い改めと呼ばれるこの大切な清めの過程についてお話す前に、私は単純ではあるが重要な2つの真理について申し上げたい。その1つは、もしあなたが全力をあげて主の戒めを守るよう努力するならば、いかなる狡猾なたくらみをもってしてもサタンはあなたをくつがえすことはできないということである。そして2番目は、このような戒めを1つでも破ったらあなたはサタンの領地に足を1歩踏み入れたことになるということである。

さて、私たちが主の犠牲による贖いを通じて神の許しを受けるに値する者となるために、また来世において永遠の生命という特権を享受するために、踏まなければならない悔い改めの段階

とは何であろうか。

罪に陥る者があり、すべての人に悔い改めが必要であると予見しておられる全能の御父は、悔い改めに関して明確な方法を定めた救いの計画を備えておられた。

まず第一に罪ある者は告白しなければならない。「人罪を悔い改めしや否やは、見よ、彼は自らこれを告白しその罪を捨つなければ、その悔い改めたることはこれによりて知るを得べし。」（教義と聖約58：43）この告白は最初に自分の行いによって最も害を受けた人に対して行なわれなければならない。真の告白はただ単に、すでに証拠が明らかになった罪を認めるだけのものではない。もしあなたが公然と大勢の人々に対して罪を犯したとしたら、あなたはその人々の前で率直に自分の恥と謙遜さと犯した罪に相当する叱責を自ら進んで受ける意志があることを示し、謝罪すべきである。もしあなたの行いが隠れたものであり、あなた以外にだれも害を受ける人がいなかったとしたら、秘かにその罪を告白すべきである。そうすれば、隠れたことを聞いておられる天父は報いてくださるであろう。（マタイ6：4参照）教会員としての資格、教会で特権や責任を受ける権利に影響を及ぼすような行ないはすみやかに、主の羊の群れを守る羊飼いとて主が任命され、また主がイスラエルの判事として委任された監督に告白すべきである。（教義と聖約58：17参照）

罪ある人がバプテスマを受けていず、また福音を理解して備えをなしているならば、その人は同じように教会の権威ある長老の手によって、罪のゆるしを得させるバプテスマを受けることができる。（ルカ3：3参照）告白に続いて罪ある者は、悪を避け善き行ないをすることによって悔い改めの実を結んだことを示さなければならない

い。（ルカ3：8参照）人は自分が取り去ったものを取りもどすために力の限りをつくして相当な償いをするか、あるいは自分が与えた損害を償わなければならない。自己の罪を悔い改め、その罪から離れ、2度とそのような罪を犯すまいと決心した者は、許されない罪を犯さない限り、罪の許しを受けるという約束を得る権利がある。このことに関して予言者イザヤは次のように述べている。「……たとえあなたがたの罪は緋のようであつても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ。」（イザヤ1：18）

しかし、この聖句のもつ真の意味をとり違えないでいただきたい。人は不浄と罪の泥沼につき、神の目から見ても不法な生活を送り、その後悔い改めらば自分の罪の結果からのがれられ、常に義と徳に満ちた生活を送った時に到達できる水準まで自らを高められるなどと考えるべきではない。主はあなたが主に対して、あるいは主のみ業に対して犯した罪を許すにあたって愛にみちたあわれみと思いやりの手をひろげておられる。しかし、主は、永遠の目的に向かって進歩するその速度を遅らせるというあなたが自分自身に対して犯した罪の結果を決して取り去ることはできないのである。

罪からのがれおせる罪人はだれひとりとしていない。いつの日か人は皆、神のみ前に立ち、骨肉の体を有していた間に行なった行いに応じて裁きを受けなければならない。（黙示20：12参照）あなたがたは今、どのようなことをお考えだろうか。罪人の重荷は聖徒のそれより軽いだろうか。

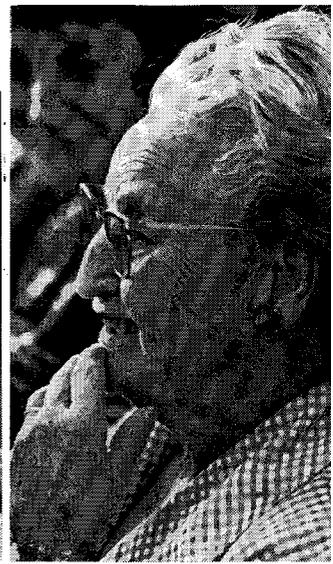
願わくば、皆さん方が人生で最もよきものを探し求められる時に、絶えず主の導きと祝福があるように、主イエス・キリストのみ名により祈り奉る。アーメン。

宣教師の役 目を果たす 日曜学校

十二使徒評議会会員
ゴードン・B・ヒンクレー

教 会のあらゆる補助組織のうちで日曜学校は特異な存在である。日曜学校は教会の全会員に対して責任を負っている。そして、日曜学校で教える教課は福音のすべてを網羅している。日曜学校は教会にある他のどの組織よりも多くの会員が登録され、また出席者も多い。日曜学校は1日のうちで最もすばらしい時間、1週間のうちで最もすばらしい日に、計り知れない程ためになることを行なっている。しかし、日曜学校で行なうべきことはこれだけにとどまらない。教会が強められなければならないとすれば、日曜学校が強められなければならない。また教会員が福音に対する知識を増さなければならないとすれば、また、人々が霊的に高められるようにするためには日曜学校がそのようにならなければならない。そうすれば、日曜学校はさらに大きな成果をあげるにちがいない。日曜学校は地上にすむ何億という人々に永遠に続く幸福な生活をもたらすという機会をひめたすばらしい組織である。日曜学校は何とすばらしい機会をもち、何と大きなチャレンジを課せられていることだろうか。

ある日、1人の男の人が宣教師用のパンフレットを取りに事務所にはいつてきた。その時彼は手に兵役に従事している息子から来た手紙を持っていた。その息子は次のように書いていた。「私に友だちができました。そこで、私は彼を私たちのわずか3、4人



宣教師の役目を果たす 日曜学校

しかない小さな日曜学校に連れて行きました。他の人々も福音についてあまり知りませんし、私も知りません。教会について知っていることといえばただ日曜学校で学んだことだけです。私に何か資料を送っていただけませんか。」

このようなことはたぶん、私たちの多くにとっても言えることであろう。ほとんどの人にとって教会について知っていることと言えば、それは日曜学校で学んだ事柄であろう。私たちは、人の心や精神が非常に多くの影響下に置かれている時代に住んでいる。1年前アメリカ合衆国大統領、リチャード・M・ニクソンは次のように述べた。「普通の高校生は卒業するまでに、学校で11,000時間を費やし、15,000時間をテレビを見ることに費やしている。」私はこれに、高校生は日曜学校のレッスンを受けるのに500時間近くを費やしていると付け加えたい。

このようなチャレンジを与えられている教会の日曜学校の役員および教師は、日曜学校をもっとよいものにしようという気持ちをいかなければならない。私は机のガラスの下に「人の力の届く範囲はその理解力の及ぶ範囲を越える」というブラウニング¹の名言を入れている。私たちはみな、教会員でありながら出席しない人々や、教会にはいることができる人で来ない人々に対して、手を差し伸べることができるよう自身の手をもう少し伸ばすべきである。

私は数年前、地方の教会で開かれたステーク大会のことを今もよく覚えている。私はその大会の席でここ18カ月の間に新しく教会に加わった人々に挙手を求めた。手をあげた人々の中に入りっぱな若い男性とその夫人と3人の子供たちがいた。私はその人にこう言った。「おしつけにこのようなことをお願いして申しわけありませんが、ここにきていただいて、あなたがどのようにして教会にはいられたか、またこ

のことはあなたにとってどのような意味があったかを10分間程話していただけたらと思います。」

その人は前に出て来て次のように語った。「私はこの砂漠に建てられた大きな工場で技師として働くためにやって来ました。私たちはここにやって来た時、教会に入ろうと決心しました。

というのは、私の妻は以前、あるモルモンの人と一緒に働いたことがあり、その人に心を打たれたからでした。私たちは手始めにこの教会に行ってみることに決めました。そういうわけで私たちはある日曜日の朝おそおそとこの建物のところに来て、ホールのおすみにあるドアの後ろを通って中に入りました。私たちが中にはいると、ある人が手を差し伸べてこう言いました。『お早ようございます。私は〇〇兄弟です。』それで、私はこれに答えて、『私の名前は〇〇です』と言いました。すると、その人は言いました。

『私は以前、あなたにお目にかかったことはありませんが、ここに移って来られたばかりですか。』『はい。』『どのワード部からおいでになったのですか。』私はとまどっていました。するとこの人は私たちが教会員ではないことがやっとわかったらしく、こう言いました。『中に入っておすわり下さい。そしてあなたがたのそばにすわらせて下さい。これから行なわれることを説明しましょう。』こう言って、この人は私たちと一緒にすわりました。分級の時間になると、この人は私の子供たちを子供のクラスに連れて行き、子供たちを教師に紹介しました。そしてこの人は私たち2人を福音の教義のクラスへ連れて行ってくれました。私たちは人目につかない後方の席にすわりました。

日曜学校が終わると、この人はこう言いました。『今晚、もう1つ集会があります。妻と私はあなたの家に寄ってご家族とご一緒しましょう。』私は言いました。『いいえ、私たちは家の車

で行きますので。』それで、私たちはやって来ました。すると、その人と奥さんは教会にいて私たちを迎えて下さいました。私たちはくつろいだ気持ちになりました。私たちは自分たちが何かを発見したことに気づきました。そして、数週間後に私たちはバプテスマを受けました。」

壇上に立っているその人は目に涙を浮かべ、やがてそれがほおをつたって落ち始めた。そして、彼はこう言った。「1カ月前、私たちはソルトレーク市へ行き、神殿へ入りました。私はみなさんがたに、このことが私たちと私たちの家族にとってどんな意味があったかをどうてい口に出して言うことはできません。」

その人の息子は今伝道に出ている。その息子とは、日曜学校で教会を知り、日曜日の午後に開かれたステーク部大会に出席していたあの小さな男の子である。

もし私が日曜学校の役員であったならば、私は日曜学校の中に敬虔のみたまが感じられるように、レッスンが活気のあるものであり、音楽が精神を高めさせるように、また日曜日の朝、やって来たすべての人々が気持ちを新たに去っていき、来週もまた出席したいという気持ちを持ってこの1週間を過ごせるようにするために努力するであろう。私は日曜学校の役員、教師たちの心に宣教師の精神を培い、日曜学校の恩恵に浴していない人々すなわち全体の50パーセントをしめている不活発な人々、またひとりだけ群れから離れている人に手を差し伸べ、活発化しようという望みを植えつけたと思う。私は教師が、このような人々を担当しているホーム・ティーチャーの名前をワード部幹部書記に尋ねるよう要請する。私はまた、このようなホーム・ティーチャーがその人のために特別な努力を払うよう依頼する。もしホーム・ティーチャーが必要とされていることを完全に行なうことができなけれ

ば、私は彼らを援助しようとするであろう。日曜学校の恩恵に浴していない人と話をする時、私はそのような人々に教会に出席するように願い求めるつもりはない。私はむしろそのような人々にどのようなチャレンジを与えたらよいかを知ることができるように知恵を求めて祈る。人々は単に教会に出席して下さいという口先だけの願いには応じないものであるが、チャレンジには応じるものである。そこで、私はクラスの生徒を、まだ教会を知らない人を日曜学校に連れてくる宣教師のようにしたいと思う。

私は1年前南アメリカのある支部で開かれた証会で、ある婦人の話を聞いて非常に感動した。その婦人はその時より3カ月前に教会に加わった人である。彼女は非常に熱心だった。その婦人はタルソのサウロと同じような経験をした人のように、熱意あふる態度で話した。その婦人はあることをしたいと望んでおり、これを行っていた。私は証会のあと、伝道部長と彼女のことについて話した。すると、伝道部長はこう言った。「3カ月前に教会に加わって以来、あの姉妹は宣教師に300人の求道者を紹介しました。そしてそのうち67人の人が教会に入りました。あの姉妹は求道者たちが日曜学校や聖餐会やMIAに来るとその人たちを案内し、もてなしました。」

もし私が日曜学校の教師だったら、私はこの大いなるみ業を行なうにあたり、主のみたまと導きと助けがあるようにひざまずいて主に祈るであろう。そして、私は生徒たちがクラスにやって来た時、もう一度出席したいと思うように教え方を研究し、私が行なうレッスンにみたまがあるように祈るであろう。私は「汝汝らく謙遜なれ、さらば主なる汝の神は手を取りて汝を導き汝の祈りに応えん」(教義と聖約112:10)という偉大な聖句を決して忘れない。また、私が今話しているこのことに関するもう1つの大いなる戒めと約

束である「汝ら熱心に教えよ、さらばわが恩恵は汝らに伴い……」(教義と聖約88:78)という聖句も決して忘れない。

教会の伝道部には1,900以上の支部がある。おそらく、2,3の例外を除いて、どの支部も日曜学校から始まったと私は考える。このように非常に小さな集会から強い支部へと成長し、大きな地方部、大きく豊かな伝道部、そして繁栄するシオンのステーキ部と成長してきている。小さな支部の日曜学校は教会にとって、後に開花し熟した果実をつけるつぼみのようなものである。福音を熱心に求めている求道者を連れてくるには日曜学校は教会の中でも最も適している集会である。あなたが宣教師のような仕事を始める時、その結果を予告することのできる人はいない。

チャールズ・A・カリス長老²は次のように語っている。「私は合衆国南部伝道部を管理していた時、2年間の伝道期間を務め終えて帰郷を目前にしたある宣教師が最後の報告をするために伝道本部に来たので尋ねました。『あなたは何をなしとげましたか。』すると彼は、『カリス伝道部長、私は何一つ成功しませんでした。私はただ自分の時間と父の財産とを浪費し、家に帰ろうとしているのです。』私は言いました。『あなたは1人もバプテスマを施さなかったのですか。』するとこの宣教師は、『いいえ、1人だけバプテスマを施しました。私は、私たちが小さな日曜学校を開いていた奥地で1人の男の人にバプテスマを施しました。しかしその人はくつさえはいていないような人でした。』」

カリス伝道部長は言いました。「私はこの宣教師がどういう意味で失敗したと思っているのかについて興味がありました。この地方部へ行った時、私は例の人について調べました。その人はくつをはき、ワイシャツを着、ネクタイをしめていました。この人は小さ

な支部の日曜学校の書記だったので。この人は次に支部日曜学校の管理会長になり、執事に按手聖任され、次に教師、そして祭司、そしてついに長老に按手聖任されました。それからその人は支部長になりました。その人は以前父親と共に住んでいた小作地を去り、少しばかり土地を買って、これを実り多い土地にしました。そして彼は地方部長になりました。彼は自分の農場を売って、アイダホに移りました。ここで、この人はスネーク・リバー谷でりっぱな農場を作りました。そして、彼の息子たちは成長して伝道に出ました。今は彼の孫たちも伝道に出ています。

さらに、カリス伝道部長はこうつけ加えました。「先週、私は教会の状況を知るためにアイダホへ行きました。そこで私は、あの失望の念を抱いて帰郷した宣教師が1人の人にバプテスマを施した結果1,100人以上の人々が教会に加わっているのを知りました。」

主ははっきりこのように言うておられる。「この故に善を為すにうむことはなかれ。これ汝ら今偉大なる一事業の基礎を置きつつあればなり。それ、小なる事より偉大なる事起る。見よ、主は真心と喜びて事に従う精神とを求む……。」(教義と聖約64:33-34)

このように、この大いなる組織は、悲しみ、不幸、失意の道を歩んでいる人々をそこから連れ出し、現在救いの教義を知らない人々に永遠の恵みをもたらすよう教会へ連れ来たるための力ある手だてとなるというチャレンジを受けている。

注：1. ロバート・ブラウニング：1812—1889 英国詩人

2. チャールズ・A・カリス：1865—1947 前十二使徒評議員会会員

この記事は1971年4月にソルトレーク市の日曜学校大会で話されたものをまとめたものである。

19 世紀も終りに近い頃、イギリスの小さな村で、子供の頃から友達として育った2人の少年が成長してそれぞれ自分の職業に就くために別れをつげた。演劇が好きだったトマス・タウンズレイは、劇団に加わった。ロバート・ウエストフィールドは勉強して牧師になるためにロンドンへ行った。

長い年月が過ぎて、今や、広いロンドン教区の牧師となったウエストフィールド師はロンドン劇場で上演される演劇についての記事を読んだ。彼はこの演劇の監督が自分の少年時代の友だち、トマスと知って大喜びだった。土曜日の夜の部を見に行った時、牧師は満席の観衆が演劇に見入っているのに

深く感動した。演劇の幕が降りると、観衆は拍手して5回ものアンコールを望んだ。ステージの後ろで、ロバートは旧友の成功を祝い、翌日、自分の教会に来るように招待した。ロバートは今まで教区民を感動させたことのある自分の説教よりもロバートの演劇の方がはるかに人々を感動させたことを認めた。

翌日教区の教会堂で、何も感ずるところのない話が終わった後、トマスはロバートに昨夜の劇と今朝の説教との違いについて、次のように指摘した。「劇場で、私たちは架空の事柄を本当の事のように演じている。あなたの説教では、本当のことを架空の事のように話している。」

教師として私たちが直面している最も大きなチャレンジの1つは、福音が真実であることを生徒に本当に真実なものとして示すことである。私たちがこのチャレンジをりっぱに果たした時はじめて、私たちの行なったレッスンは生徒たちの生活の中でいかされるのである。

小さな子供たちは信じやすく、また純粹であるために、福音が真実であることは目に見えないがそれを真理として受け取りやすい。両親からイエスが天におられ、あなたを見守って下さっていると教えられた3才になる女の子がひとりで遊んでいた。母親が聞いているとも知らずに、その小さな女の子は上を見てささやきかけた。「こんに

真実を真実 なものとする

ローレンス・R・フレイク



ちは、イエス様。」この子にとって主は抽象的な存在ではなく、話をする事ができる仲良しの友だちなのである。もし私たちが福音が真実であるという生徒の信仰を維持させることができなければ、目に見えないことを確かな事実であると信じていた貴重な子供の頃の確信を失なわせていくかもしれない。

最近、ある学生ワード部の監督が不活発な大学院生を訪ねた。この学生と話してみると、監督はこの学生が少年の頃、教会で非常に活発だったことがわかった。現在の不活発は理由を問う監督の質問に対して、その学生はこう答えた。「監督さん、大学にはいった時、私は大発見をしました。私は、結

局、イエスが私に光となるように(「子供の歌」B-67参照)とは望んでいらっしやらないことを知ったのです。」この学生が子供の頃習った歌に対してこのように言っていることから、この学生のイエスに対する証、また救い主が自分を愛して下さっているという理解が子供日曜学校で学んだころ以来、成長していないということが明らかである。この学生が十代の頃献身的な教師によって、このささやかな歌が教えている概念を信じた幼ない日の信仰を正しく伸ばされていたら、キリストの愛に対する認識はどのようにちがっていただろうか。この学生とあまり変わらない年齢のある青年が主に対する信仰を持ち、福音の誓約をまもり、優れた

模範を示しているとしてもそれは想像を絶するようなことではない。イスラエルの息子、ヨセフがポテパルの家でしもべとして仕えていた時、彼は主人の妻の邪悪なたくらみに断固として逆らった。主人の妻に対するヨセフの勇敢な答えは、主がイスラエル人に与えられた約束がヨセフにとっていかに真実なことであるかを示している。ヨセフはこう言ったのである。「どうしてわたしはこの大きな悪をおこなって、神に罪を犯すことができましょう。」(創世39:9参照)ヨセフは誓約が真実であると非常に強く感じていたのでこれを破ろうとは思わなかったのである。

生徒たちは福音の教えが真実である



と感じ始めると、自分が福音に対して約束をしたということから大きな力を得ようになる。私たちが自分の生徒に真実なことを真実として示すためにはどのような方法があるだろうか。

開拓者が受けたきびしい苦難は、非常に多くの幸福と安楽を祝福されている今日の若者にとっては、時に理解しがたい教会歴史の一面である。ある教師は、開拓者たちの旅の苦しみを生徒たちに実際に感じ取らせるために次のような方法を用いた。あるはだ寒い朝この教師は2、3分取って開拓者たちの苦勞とひどい苦難について簡単に話した。また、この教師は、1847年から1869年の間に平原で6,000人以上もの人々の悲しくもあわただしい葬式が執り行なわれたことを話した。それから生徒は一言も口をきかないという約束でオーバーを着ずに外へ出て行き、人の来ない所に前もって積み重ねられた石の山をとり囲んだ。教師は生徒たちに、自分たちの子供を亡くして埋葬したばかりの両親になってみるように言った。そして墓を狼から守るためにその上に石が置かれていることを説明した。生徒たちは教室にもどる前に寒い中で2、3分静かに黙想にふけた。

そのあと、これといった話もせず教師は生徒たちにそれぞれ自分が感じた事柄や気持ちを紙に書くように言った。それから、生徒たちは「恐れず来たれ聖徒」(讚美歌23番)を歌ったのである。

もしこのような経験を効果的に用いるならば、生徒たちはレッスンの目的に関して長い講義を聞くよりも、わずか2、3分で先祖たちの苦勞がどのようなものであったかがわかり、これをいつまでも忘れないであろう。

戒めを守ることの大切さについて教える時は、よく考慮して選択した話し手をクラスに招待し、話してもらおうと生徒たちはその重要性を真実なもの

として感じるであろう。

アルコールの誘惑と戦っている禁酒連盟の人¹と1時間ほど一緒に話すのも非常に効果的であろう。同様に、タバコや幻覚剤におぼれた経験のある人に出席してもらおうと、生徒たちは「知恵の言葉」が本当に価値のある戒めであることに深く感動するであろう。合州国の多くの州では、刑務所の職員が服役者をクラスへ連れて来て、刑務所での生活がどれほど不幸かを話してもらおうことができるかもしれない。

もし私たちが鋭い感覚を持ち、創造性に富んでいるならば、私たちは使い古したレッスンの技術を避け、真実を架空のことにように生徒に感じさせないようあらゆる方法を考え出すことができるはずである。

試験をすることによっても、生徒たちが真実のことを真実のこととして感じるような経験をさせることができる。たとえば、予言者ジョセフ・スミスのような偉大な指導者の生徒に関するレッスンを終えた後、名前や日付、場所、出来事を書かせる簡単な答えだけを要求するテストをするよりも、生徒に次のような質問について答えさせてはどうだろう。「もしあなたが予言者ジョセフと共に15分間だけ過ごせるとしたら、あなたは予言者と何について話し合いますか。この質問に答える時に、生徒たちはジョセフ・スミスを本の中にある名前や絵でみる予言者としてでなく、生徒たちが実際に話をすることができる生きた人として考えるであろう。

誘惑に関するレッスンであるならば、生徒たちに若者が伝道に出るのをサタンがいかにして妨げ、また若者たちが神殿結婚するのをいかにして妨げようとしているかを、サタンの見解に立って徐々に行なわれるそのたくらみを明確に系統だてて説かせることにより、これを実際のこととしてとらえさ

せることができるだろう。

福音を考える教師として私たちのほとんどは、それぞれ自分の個性に合った概念、また生徒に真実であることを真実として見い出させる方法を使ってレッスンを改善することができる。聖霊の賜と絶えざる啓示によって、私たちはイエスとイエスの福音が真実であることを知り、また教えることができるのである。次の話は、1964-65年、ニューヨークで開催された万国博覧会での出来事である。

ニューヨーク・ステーク部のステーク部長であった故G・スタンレー・マカリスター部長はバチカン・パピリオンで働いていたカトリックの牧師と話をする機会があった。2人はそれぞれ自分の属する教会の展示品について話をしながら、展示されている印象的なイエスの彫刻を見比べていた。カトリック・パピリオンはイエスの母マリヤが息とだえた救い主のなきがらをその腕に抱いているところを表わしている。ミケランジェロの作品「ピエタ」を展示していた。モルモン・パピリオンではソルバルセン作による復活された救い主が人に向かってそのみ手を差し伸べておられるところを表わした「キリスト」を展示していた。牧師はこの2つの展示品の違いを指摘して次のように言った。「私たちには亡くなったキリストがおられる。しかも、あなたがたには生きているキリストがおられる。」

このように救い主が本当に生きておられることを教え、また全地の面における唯一の真にして生命ある(教義と聖約1:30参照)この回復されたイエス・キリストの教会に属するということは何とすばらしい特権であろうか。

1. 独力あるいはかつての中毒者の助けによって、アルコール中毒から立ち直ろうと努力している人々の連盟。

「みたま」 は証す

十二使徒評議員
ボイド・K・パッカー



私 たちが今朝行なったように、聖会において、教会幹部を支持する挙手を行なったのはちょうど1年前の今日であった。十二使徒定員会の一員としての支持の提議で私の名前が読み上げられたのは昨年4月の朝であった。そしてこの世における主イエス・キリストの特別な証人として召されていた他の人々と共に立つことが私の責務となった。

皆さんは私がこの召しを受けた時に、なぜ私にこのような召しがきたのか、私と同じように不思議に思われたに違いない。私はふさわしさを保たれ、導びかれ、備えられているという去りがたい、安らかな、不断の気持があったということが、時として偶発的なことのように思われた。

今朝私たちは教会の大管長を支持する挙手をしたが、これは私たちの特権である。私はこれが大きな特権であり、特別な責務であると考えている。なぜなら私は大管長に関してある証があるからである。

昨年4月の総大会の数週間前のある金曜日の午後、私は週末の大会での自分の割当てについて考えながら、事務所を出て5階から降りてくるエレベーターを待っていた。

エレベーターのドアが静かに開くと、そこにジョセフ・フィールディング・スミス大管長が立っておられた。私は一瞬驚いた。というのは、スミス大管長の事務所は下の階にあったからである。

エレベーターのドアがあいて大管長が立っておられるのを見た時に私はある強い証を感じた。そこに神の予言者が立っておられる。そのように感じた。光のような、すなわち何か純粋な英知のような「みたま」の快い声が、この方は神の予言者であるとはっきりと私に語った。

末日聖徒にこの体験をことさら述べる必要はないと思う。このような証は、私たちのこの教会に特有なものである。そして、それは高い職にある人にだ

「みたま」 は証す

け与えられるものでなく、すべての会員が得ることのできる、欠くべからざるものである。

大管長に対して証をもつと同様に、副管長に対してももつのである。

ここから北方のワサッチ山脈に3つの峰がある。詩人であればそれらの峰を、雄々しい石のピラミッドと呼ぶであろう。地図を見ると三峰の真ん中にある最高峰は、ウィラード・ピークだということがわかる。しかし開拓者たちはこれらの三峰を「ザ・プレジデンスー(大管長会)」と呼んだ。ウィラードへ行って東の方を見わたすと、彼方に「ザ・プレジデンスー」がそびえている。

大管長を与えて下さった神に感謝する。あの三峰のように、大管長会は他の何よりも天に近くおられ私たちの支持の挙手を必要としておられる。このような崇高な指導者の召しは時として孤独なものである。なぜなら、彼らの召しは人を喜ばすものではなく、主を喜ばせるものだからである。神がこれらの偉大な方々を祝福したまわんことを祈る。

過去1年の間に私はしばしば質問を受けてきた。多くの場合それらの質問は好奇心から生じたつまらないもので、キリストの証人として立つための条件についてであった。彼らが尋ねるのは、「イエス・キリストを見たことがありますか」という質問である。

これは私が他の人に対して1度も尋ねたことのない質問である。私はこのような質問は非常に神聖な個人的なものであり、人がある特別な靈感によって実にある権能を授けられた時にさえ、尋ねることの恐れ多いものであると考えているので、定員会の兄弟たちに尋ねたこともなかった。

話すべきでない神聖な事柄がいくつかある。私たちはそれが神殿に関することであることを知っている。神殿では神聖な儀式が行なわれ、人々はそこで神聖な体験をする。しかし私たちは神殿の持つそのような性質のため、その神聖な壁の外側では、内部で行なわれることについて語らないのである。

それは秘密ではないが、神聖なものだからである。すなわち語り合うものではなく、心に留め、また深

い畏敬の念をもって守り、顧慮すべきものである。

私は予言者アルマが次のように述べた意味がわかるようになった。

「……神の奥義を知ることは多くの人に許されている。しかしその人々は神が世の人に下さるほかに、何の教えも伝えてはならないと言う神のきびしい命令を受けている。神がその教えを人に許したもうのは、世の人が神に仕える熱心と従順の度合による。それであるから心をかたくなにする者は僅ばかり神の教えを賜わり、その心をかたくなにしない者は全く一つのこらず神の奥義が解るまで教えを賜わる。」(アルマ12：9-10)

この教会において高い職にある指導者や、ワード部および支部の会員たちが「私は神が生きてまい、イエスがキリストであることを知っている」という同じような言葉で証するのを聞く人々はみな、次のような疑問を感じる。「なぜもっと明解な言葉で言わないのだろうか。」「なぜあの人たちはもっと明確にもっとわかりやすく言わないのだろうか。」「使徒たちはもっと他に言うことはないのだろうか。」

神殿での神聖な経験がどれほど私たちの証を培うことであろう。証は神聖であって、私たちが証を言葉として述べようとすると、同じ言葉になるのである。使徒たちは初等協会の小さな子供たちや、日曜学校の若者たちが述べるのと同じ言葉でこう証する。「私は神が生きてまい、イエスがキリストであることを知っている。」

私たちは予言者や子供たちの証を軽んじるべきではない。なぜなら、「神は天使によって男ばかりでなく女にも御言葉を伝えたまい、そればかりでなく、またたびたび賢人や博学の知識も及ばない御言葉を子供に与えたもう。」(アルマ32：23)

何か新しい劇的な方法で与えられる証を求めている人がいる。

証を述べることは愛を伝えることと似かよっている。ローマン主義者や詩人、あるいは愛し合う男女は、時の初めからより強く愛を訴える言葉の表わし方、歌い方、書き方を求めてきた。そして、すべての形容詞、最上級の意味を表わすすべての言葉、あ

らゆる詩的な表現を駆使してきた。しかしこれらのことすべてが言い尽くされ成し遂げられると、最も力に溢れた言葉は簡単な短い言葉になるのである。

誠心誠意求めている人にとっては、これらの簡単な言葉で表わされた証で充分である。なぜなら、証をするのは心であって、言葉ではないからである。

電気のように実際的な伝達力を持つものがある。人間は空気中に映像や音を送り、アンテナで捕えて再生し、見たり聞いたりする手段を工夫してきた。

このもう1つの伝達手段もそれと似ていて、百万倍もの力を増し加えられた証となって、常に真理をもたらししている。

私たちが純粋な英知を得るには1つの過程がありその過程を通して私たちは何ら疑いをはさむことのできない確固たるものを知ることができるようになるのである。

私は「みたま」の導きによらなければ、軽々しく尋ねたり答えたりしてはならない質問があると申し上げた。私は他の人々に対してそのような質問をしたことはない。しかし、質問された時ではなかったが、彼らはその質問に答えるのを聞いたことがある。彼らは「みたまが証す」の神聖な時に、「みたま」の勧めによってそれに答えたのである。(教義と聖約1:39参照)

私は幹部の1人が次のように言うのを聞いたことがある。「私は自分の経験から、イエスがキリストであるということは、言い表わし得ないほど神聖なことであると知っています。」

またある幹部は「私は神が生きたもうことを知っています。主が生きたもうことも知っています。それだけでなく、私は主を知っています」と証をされた。

彼らの証に意味をもたらし、力を与えたものは、その言葉ではない。「みたま」である。「……人が聖霊の力で語るときには聖霊がその話を人の心の中に浸みこませる。」(Ⅱニーファイ33:1)

私は、この聖なる職に召された人々の中では自分があらゆる面で最も小さな者である。という気持を

常に抱きつつ、謙遜にこの話をしている。

私は証はしるしを求めることによって得られるものではないということがわかってきた。証は断食と祈り、行いと試し従順によって得られるものである。また主の僕たちを支持し、彼らに従うことによって得られる。

カール・G・メーザーは何人かの宣教師を連れてアルプス山脈を横切っていた。一行が頂上にたどりつくくと、メーザーはそこに休んだ。メーザーは後方の氷河を横切る道を示すために雪の上に立てた何本かのポールを指さして言った。「兄弟たち、あそこに神権がある。あの棒は私たち以外の人々のように、何の変哲もない普通の棒だ。しかしあのポールが立っている位置が、私たちにとって大切なのだ。もし私たちがあのポールの示している道からそれたら、私たちは迷ってしまう。」¹

私たちはここで挙手し、主の僕を支持した。また私たちは行かないによって支持しなければならない。これが私たちの証を決めるのである。

さて私も皆さんと同じように、なぜ私のような者が、聖なる使徒職に召されたのか不思議に思っている。私には多くの面でこの召しを行なうに必要な条件が欠けている。この条件を満たすために、努力しなければならないことがたくさんある。このことについて考えていると、私はたった1つ、おそらくこの職に召された理由だと思われることに1つだけ気付くのである。それは私が先ほど述べた証を持っているということである。

私はイエスがキリストであるということを皆さんに証する。私はイエスが生きたもうことを知っている。イエスは時の絶頂にお生まれになり、福音を教え、試みにあわれ、十字架にかかられた。そして3日後に復活された。イエスは復活の初穂であり、骨肉の体を有しておられる。これらのことを証する。私はイエス・キリストの証人である。イエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

1. アルマ・P・バートン、「モルモンの教育者カール・G・メーザー」 P.22

兄弟の皆さん、私は神権者の方々と共に集会を持つ特権が与えられていることを常に幸福に思っている。前にも申し上げたが、私は様々な国で高い地位にある人々、責任ある地位についている人々、指導者、行政関係の仕事に携わっている人々など多くの人々に会ってきた。しかし私は神権者と会う時には、他のどのような人々と会う時にも感じることでできない特別な気持を感じる。

今までここで語られたすばらしい話に耳を傾け、ここに集まった皆さん方を拝見し、リー副管長の弁によれば17万人といわれる今晚の出席者の方々すべてのことを考え、また神権を持つ兄弟として、友情と兄弟愛を分かち合う祝福を享受する一方、私はまた私たちと共にここにいず、私たちの群れにいない人々のことを思いめぐらしていた。彼らは自分は必要でなく、理解されることもなく、愛されていないと思っているのである。

すべてのワード部に12歳から70歳までの年令にあつて、自分ではそれを否定するかもしれないが、兄弟愛に飢え、教会で活発な生き方をしたいと望んでいる人々がいる。

指導者である私たち、また私たちすべてはあらゆる人々が幸福を探し求めているということ覚え、決して忘れないようにしようではないか。だれもが幸福になることを求めている。すべての人々に、幸福と成功への道を示すことは、私たちに与えられている大きな特権であり責任である。小さな何でもない、あるいはただ1つの誤解が不活発の原因となることがある。自分が顧みられず、感情を傷つけられたと感じ、自分自身の罪のためにやましさを感ず、すべてから見離されて自分には居るべき場所がなく、自分は何の価値もない必要のない人間だと思ひ、その結果落胆し不活発になっている人々がいる。彼らは自分たちは道をふみはずし、許されるはずはないと感じている。そのような人々に対して私たちは

指導者として、私たちが彼らを愛していることを感じさせ、主が彼らを愛したまい、心から悔い改めるならば主は彼らを許したもうことを理解させなければならぬ。

合衆国に「迷い子の息子は今宵いずこに」という古い歌があるが、私はこの歌詞を「わたしの息子は今宵なぜ迷う」に変えた方が、私たちにとってもっと深い意味を持つことになるのではないかと思う。

もし今日の午前、午後、そして今晚の大会につどわれた皆さん方がここで与えられた教訓に聞き従うならば、決して迷い子の息子にはならないであろう。

しかし前に私が申し上げたように、周囲の扱い、無視、あるいは自分が必要とされていないと感じることによって、少年は時折迷うことがあるのである。

主は迷える羊のたとえを話された。私はこのたとえ話が重要だと思うので、ここでその聖句を読みたいと思う。

さて、取税人や罪人たちが皆、イエスの話を聞こうとして近寄ってきた。するとパリサイ人や律法学者たちがつぶやいて、「この人は罪人たちを迎えて一緒に食事をしている」と言った。そこでイエスは彼らに、この譬をお話しになった、「あなたがたのうち、百匹の羊を持っている者がいたとする。その一匹がいなくなったら、九十九匹を野原に残しておいて、いなくなった一匹を見つけるまでは捜し歩かないであろうか。そして見つけたら、喜んでそれを自分の肩に乗せ、家に帰ってきて友人や隣り人を呼び集め、『わたしと一緒に喜んで下さい。いなくなった羊を見つけましたから』と言うであろう。よく聞きなさい。それと同じように、罪人がひとりでも悔い改めるなら、悔改めを必要としない九十九人の正しい人のためにもまさる大きいよろこびが、天にあるであろう。」(ルカ15:1-7)





迷える 人々を捜す

「いなくなった羊を見つけました」

第二副管長

N・エルドン・タナー

迷える人々を捜す



すべての監督、ステーキ部長、またあらゆる組織の指導者たちは、だれに注意を向けるべきかを知っている。私たちにはその迷える羊を捜し出す責任がある。現在迷っている若者を知っているならば、あるいは別の道に迷い込みそうな若者に気付いたら、私たちは一時の猶予も許さず、迷える人、溺れかけている人、助けを必要としている人を全力をあげて救わなければならない。教会に不活発な人々、あるいは不活発その他の理由で教会を離れているすべての人々は、若い人も年配の人も同様に私たちの助けと関心を必要としている。私たちは彼らのために祈り、思いやる必要がある。彼らの1人が私たちの群れに戻ってきて活発になったら、私たちはなんと大きな喜びと幸福を感じるであろうか。

私たちが1人を救う時に私たちは1家族を救っているとんでもない過言ではないであろう。1人を救うことによって、私たちは次の世代をも救い得るのである。1人を失う時、私たちはその人だけを失うのではなく1家族とその子孫をも失うのである。その責任は大きい。私たちの中には、会員の40パーセントから70パーセントの出席者がいれば非常に喜ばしいと思っている人がいるようである。もし40パーセントの出席者がいれば、欠席者は60パーセントいるわけである。またもし70パーセントの出席者であれば欠席者はまだ30パーセントいるわけで、このような人にこそ私たちの関心を向ける必要があるのである。

私はあるステーキ部大会に出席したが、その時監督の話聞いて非常に心を動かされた。その監督は涙を流しながら次のように語るのがやっとならった。

「私は今晚ここで私のホーム・ティーチャーに感謝の気持ちを申し上げたいと思います。私は不活発な成人アロン神権者でした。そしてそのホーム・ティーチャーは私を助けて下さいました。本当のことを申しますと、私は最初、ホーム・ティーチャーに会いたくないと思いました。そして訪問を拒否しました。しかし彼は私が彼を家に入れるまで訪問を続け、私に教えて下さいました。そして現在私は彼の

監督をしています。私を救って下さったあのホーム・ティーチャーに私は心から感謝しています。」私は迷う人々を救うために、与えられたあらゆる力を使って耐えざる努力を続けるこのような立派な人々と与えたもうた主に心から感謝申し上げる。

私は次に申し上げる話を前にもしたことがあると思う。ステーキ部長の時に、私は1人の青年に会った。その青年は非常に有能な青年で、農業の専門教育を受けていた。その頃私たちは福祉委員会の農業顧問を必要としていた。彼は教会に活発でなかった。私は彼が「知恵の言葉」を守っていないことを知っていた。しかし私はある日彼を昼食に誘った。すわって話しながら私は自分の考えていることを次のように述べた。「あなたはこの仕事のために最も備えられた有能な青年です。私たちはあなたを必要としているし、あなたにも活動が必要です。」

しばらく話した後、青年はこのように言った。「タナー部長、あなたは私が知恵の言葉を守っていないのをご存知でしょう。」「ええ、けれどもあなたには守れます。」私はこのように言ったが、これは口先だけのことではなかった。

青年は言った。「ステーキ部長、あなたは変わったことをおっしゃいますね。先月、監督が私の所へ来て、ワード部の仕事をするつもりがあるかどうか聞かれました。私は自分が知恵の言葉を守っていないことを申しました。すると監督はこう言われました。『それではだれか他の人にあたってみましょう。』」

こうして私はその青年としばらく話をした。「兄弟、よく聞いて下さい。あなたは教会で活動することが必要なのです。そして私たちは本当にあなたを必要としているのです。」

しばらく話し合った後、青年はこのように言った。「私とその仕事に携わるということは、コーヒー1杯も飲めなくなるってことですか。」

「そうです。あなたのおっしゃるとおりです。どんな指導者であっても指導者に変わりはありません。そしてあなたも模範にならなくてははいけません。あなたがステーキ部の委員になったら、私た

ちはあなたに福音に従って生き、正しい生活をしてほしいと思います」と私は答えた。

「それでは、よく考えてみます」と青年は答えた。

「よく考えて下さい。しかし忘れないで下さい。あなたは活動しなくてはいけないんです。私たちもあなたを必要としています。」私がこのように言うと、青年は「それでは決心がついたらお知らせします」と答えた。

彼は次の日になっても電話をかけてこなかった。その翌日、またその翌日も電話はなかった。6日目、その日もやはり何の連絡もなかった。その時私は思った。いや、彼は知恵の言葉を守れないと思われたくないだろうと。

8日目に連絡がきた。彼はこう言った。「タナー部長、あなたは今でも私があの仕事をしよう望んでおられますか。」

私は答えた。「もちろんですとも。私が先日その事をお話したのはそのためではありませんか。」「それなら私はお引き受けしたいと思います。ステーキ部長がおっしゃった条件も守ります」と青年は答えた。

そして青年はその言葉どおり実行した。彼は30代で独身であった。彼は教会に活発になった。当時教会にはステーキ部MIAの会長をしている非常に美しい若い女性がいて、青年はこの女性と会って親しくなり、恋をし結婚した。

それから彼は監督になり、高等評議員となり、ステーキ部長会の一員となった。この青年が活発になり、また彼の家族が活発になったことを知った時、私が心に大きな満足を感じたことを皆さん方はおわかりになると思う。彼には今大勢の子供がいるが、彼らもまた活発である。

兄弟の皆さん方、私たちはどこにいようと何の職にあらうと、私たちの周囲に不活発な若者たちや年配者がいることを認識すべきである。私たちがこのような人々に福音に対する興味を起こさせ、本心では活発になりたいと思っていることを彼らに自覚させる方法を見い出すことさえできたら、彼らは活発

になりたいと思うであろう。

兄弟の皆さん、私は今晚次のようなチャレンジを皆さん方に与えたい。監督の皆さんは積極的に働いて、来月までに不活発な青年を活発にするように、副監督の皆さんも同じように努力してほしい。またそれぞれワード部やステーキ部で責任を持っておられる皆さんもこのことに努力していただきたい。兄弟の皆さん、この世で人を救うことほど大切なことはない。私たちにはそのためのプログラムがあり、教師にその方法を教えている。私たちは集会に出席する人々がこれらすべての恩恵にあずかることができるように、教師を援助することができる。しかし残念なことに私たちは、不活発な人々のことを忘れてたり、無視している場合があまりにも多すぎる。そして50パーセントや60パーセントの出席率で満足しているのである。

私は決してパーセンテージや統計上の数字にこだわっているわけではない。私が本当に関心を抱いていることは私たちの群れにいない青少年のことである。兄弟の皆さん、私は今晚皆さん方、神の神権を持っておられるすべての方々、特に教会で責任を持っておられる皆さんに次のことを強調したい。主が言われたように迷える羊を見い出して連れ戻すよう努力していただきたい。そうすれば皆さんは天父と相まみえる時に、連れ戻したその人と共に喜びを見い出すであろう。

若い皆さんに申し上げる。福音から離れることに楽しいことなど1つとしてない。皆さんが常に神権を尊び、神権を尊ばない友人を助けて彼らが神権を尊ぶことができるようにするなら、皆さんも福音を離れることなく、彼らも幸福であるはずである。

兄弟の皆さん、私は証する。私たちは神の神権を持っている。この教会は神の教会であり神の王国である。神は私たちに、隣人を救うために教え助ける責任を与えたもうた。願わくば、私たちが主のみむねにかなう方法で責任を果たし、それによって喜びを得、永遠の生命を得る備えをなすことができるように、イエス・キリストのみ名によりへりくだって祈る。アーメン。

借り物の光では 耐えられない

十二使徒評議員会補助
ヘンリー・D・テイラー

各地のステーキ部を訪れ、兄弟姉妹の忠実で献身的な働きを目にする人は、主に仕え、隣人を助ける業に携わっている人々に感銘を受けている。

奉仕を望む気持は、皆さんが従事している業が真の主のみ業であるという強い確信に基づいて生まれる。この確信が証と呼ばれ、この証は正しい行いや積極的な行動を生む推進力、原動力となっている。皆さんの献身的な働きを目にした人は、末日聖徒イエス・キリスト教会の底力は教会員個人個人の証にあると結論づけるのである。

教会のすべての会員は、天父なる神が死にたもう方ではなく生きてましますことを知る権利を与えられている。また私たちは長兄であるイエス・キリストが世の救い主、贖い主であり、私たちが私たち自身の行ない如何によって救われて昇栄を得、再び天父と共に住むことができるように、私たちの前に扉を開いておられるということを知る権利を与えられている。私たちはこの確信と証を真剣に求めなければならない。ブリガム・ヤング大管長の副管長であったヒーバー・C・キンボール長老は、1856年に聖徒たちに次のような警告を与えた。

「あなた方の信仰を試すために多くの試しが来るであろう。男であれ女であれ借り物の光では耐えられなくなる日が来る。あなた方1人1人が真理についての自分の知識を得、自らの内にある光によって導きを受ける必要がある。」

マッケイ大管長は若者たちに、たとえ若くとも次のような一つの大切な教えを学ぶならば、真理に関する知識と福音に対する証を得ることができると述べた。「清い心、日ごとに救い主の導きを求めようという誠実な心が、キリストの福音の真理に関する証をもたらすのである。」この教えは清い生活と祈りによって証がもたらされることを示している。

ジョセフ・スミスが信じて真剣に考えていた問題の答えを天父に求めて祈ったのは、彼がまだ一介の若者にすぎない時であった。そして彼は天父と主イエス・キリストにまみえるという祝福を受けたのである。

イエスの弟子たちを迫害していたタルソのサウロは、後にダマスコへの途中で劇的な体験をして、キリストの擁護者、使徒パウロとなった。天から光がさし、『サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか』と呼びかける声を聞いた。そこで彼は『主よ、あなたはどなたですか』と尋ねた。すると答があった。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。とげのあるむちをければ、傷を負うだけである。』

(欽定訳、使徒9：3-5)

これら2つの出来事はめったに起こることではないが、聖霊はこれら2つの場合と同じように深い不変の影響を与え得る。ジョセフ・フィールデング・スミス大管長は次のように述べている。「従って、たとえ救い主にまみえようとも、聖霊の証が霊に与えるほどの深い感動を受けることはないのであ



る。聖霊によってもたらされる感動は、示現による感動よりもはるかに重要なものである。みたまが霊に語りかける時、それは霊に刻み込まれ、決して消し去ることのできないものとなる。」(「熱心に求めよ」P.213-214)

この真理はモルモン経の3人の見証者の体験からさらに詳しく説明できる。オリヴァ・カウドリ、デビット・ホイットマー、マーテン・ハリスの3人はそれぞれ天使にまみえ、後にモルモン経に翻訳された金版を見、触れ、またその記録が真実なものであるという主のみ声を聞いた。しかし後にこの3人はいずれも不満を持つようになり、指導者とうまくいかなくなると、不信仰と背教に陥った。しかし、「みたま」に刻み込まれたしるしが非常に大きかったために、そのうちの1人として証をうち消した者はいない。そしてその証は今もモルモン経にしろされている。私たちの最も深いところに存在する内なるものにささやきかける静かなる細い声は、外見的なしるしや現われよりもはるかに価値あるものである。

後に教会の第5代大管長となったロレンゾ・スノーは、1836年オハイオ州カートランドで改宗し、バプテスマを受けた。青年であった彼は救い主の教えと宣教師の教えとを熱心かつまじめに研究した。そして福音の真理を確信するようになると水に沈められるバプテスマを受けたいと思った。

スノー兄弟は按手確認を受けて以来、自分が聖霊を受けていたかどうか確信を得たいと思っていた。バプテスマの2、3週間後、スノー兄弟は自分がまだ真理に関する証を受けていないことを感じた。不安な気持ちにおそわれて本をかたわらに置くと、家を出て野原をさまよった。陰うつな気分と何とも

言しようのない黒い雲が自分をおおったように感じられた。スノー兄弟はいつも1日の終りごろになると、近くの奥まった木立ちにはいって秘かに祈ることにしていた。しかしその晩はそのような気持ちにならなかった。祈りたいという気持はなくなって、自分の頭を天が厚くおおっているように感じた。しかし、スノー兄弟は自分の習慣である夕べの祈りをやめないことにし、いつもの場所に行ってひざまずくと、敬虔な祈りをささげた。

スノー大管長はその時のことを回想してこう語っている。「私が祈りを捧げようと口を開くと、たちまち私の頭上すぐ近くで網ずれのような音を聞いた。それからすぐに神の「みたま」がおりてきて、私の体全体、頭の前から足のつま先までを完全におおったことを感じた。その時の喜びと幸福がどんなものであったことか。どのような言葉をもってしても、精神も霊をも暗く厚くおおっていた雲が、全く突然に光と知識の輝きへと変化した時のことを表わすことはできない……その時私は神が生きてましまし、イエス・キリストが神の御子であり、聖なる神権が回復され、全く福音が回復されたということを知ったのである。それは完全なバプテスマであった。天の原則であり要素である聖霊に浸されたまぎれもないバプテスマであった。そしてそれは水に沈められた時よりもはるかに私の肉体のすみずみに真の力を与えるものであった。」(エライザ・R・スノー、「ロレンゾ・スノーの伝記と家族の記録」P.8)

このようにしてスノー兄弟は、主の「みたま」が彼にくだった時に、慰めとなる確信を得、聖霊の祝福によって証を得て、この世の生涯を終えるまで常にこの証をもって過ごしたのである。

証は神から与えられる比類のない賜物である。しかし、たとえ人が聖霊によって証を得たとしても、もしその人が常に証を維持するように努力しなければ、この証を常にゆるぎないものにしていくことができるという保証はない。

証を得ても不注意であったり、ないがしろにしたり、怠惰であったりするならば、それは失われる。

私たちは証に栄養を与え、食物を与えなければならない。リー副管長は次のような賢明な勧告を与えている。

「もし私たちが毎日聖典を読まなければ、証は次第に弱まり、霊性は高まらない。」(十二使徒会地区代表セミナー1970年12月12日)

救い主が神殿で教えておられた時、ユダヤ人の教師たちは、彼らを驚かせたイエスの教えがどこから来たものであるのか、イエスに尋ねた。この人の知識はどこから来たものだろう。イエスは彼らの質問に答えて言われた。

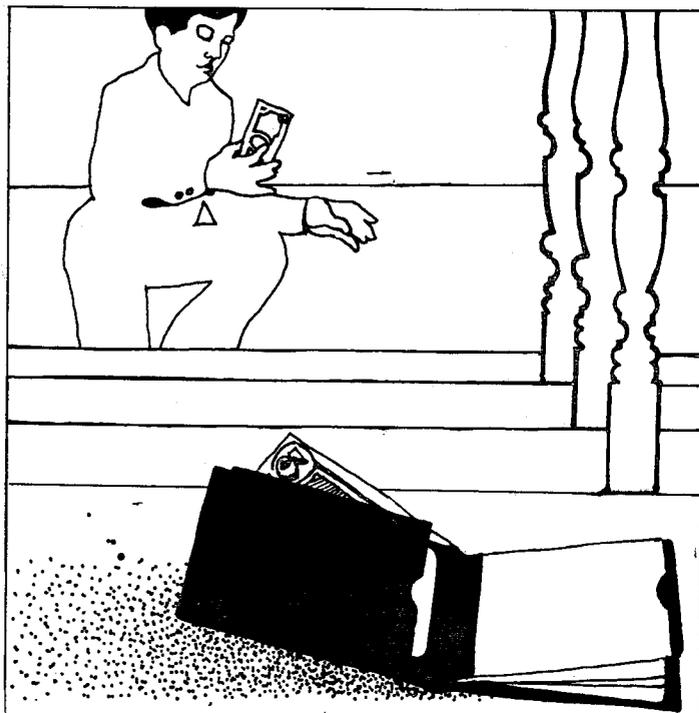
「……わたしの教えはわたし自身の教えではなく、わたしをつかわされたかたの教えである。神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教えが神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう。」(ヨハネ7:16-17)

主の答えはその言葉の表わす通りであって、主が語られた当時の人々にあてはまる言葉であると同様に、今日の私たちにもあてはまるものである。私たちが御父のみこころを行ない、戒めを守るならば、聖霊は私たちに真理を明らかにするであろう。それは明らかである。私たちがこのように行ない、「みたま」を受けることができるように、主イエス・キリストのみ名により祈り奉る。アーメン。

正直と

十二使徒評議員

デルバート・L・ステイプレー



信 仰箇条第13条の最初の部分に、「われらは正直なるべきことを信ず」という言葉がある。正直という言葉は多くの意味を含んでいる。すなわち高潔、誠実、真理に従う、公平、誉れ、清い生活、徳に満ちた性格、人との交際における公正などである。

これらの原則は真の末日聖徒にとって必要な徳である。

末日聖徒イエス・キリスト教会は、人が知っている最も崇高な理想、主義、標準を掲げている。教会、その教え、教会が表明しているものに関して、私たちが恥ずべきものは1つとしてない。私たちの教会は、あらゆる場所で人々の生活に数えきれぬほどの良い影響を及ぼしているのである。

ロバート・バーンズ¹は次のように言った。「正直者は神の最高の傑作である。」高い地位にある人々の間で正直と高潔が衰退し、徳が失われつつある今日、だれかがこれらの原則を熱心に教え、実践し、人格を形成する上で欠くことのできない要素であることを強調しなければならない。現在、わが国の行く末を決定する人々にとって、道徳的に完全な姿にたち返ることが次第に重要なこととなっている。そうでなければ、この国の自由は脅かされることであろう。私たちの国民生活における、政界、実業界、財界、知識階級の不正直、不正利得、腐敗などが、

世界の指導者としてのわが国の地位や力を弱めている。

私たちは心からへりくだり誠実になって、私たちよりもすぐれた力あるお方がおられ、そのお方によって、私たちの人生に大切な意味と目的をもたらす道徳律がもたらされたことを認識しなければならない。また私たちはこのような正直、尊敬、名誉は売買されるようなものではないことをもう一度思いださなければならない。それらはあなたがたや私、そしてすべての人々が日常生活に取り入れなければならない要素である。

カーライル²は次のように言った。「正直になりなさい。そうすればこの世から悪人が1人減るのがわかる。」自分が善良な人間でなくして、本当に正直な人間が世にあり得るだろうか。また自分が正直な人間でなくして、本当に善良な人間があり得るだろうか。正直はまず自分自身から始めるべきであろう。それでなければ、他人が正直であるかどうかはわからない。私たちが見るのは他人ではなく、私たち自身がどうあるかを見るのである。私たち一人一人がまず正直になること、すなわち他人との交わりにおいて正直であること、教会員として正直であること、また神の戒めを正直に守ることである。

モーサヤ王の息子たちについては次のように言われている。「かれらはみな神の命令に服従すること、神の前に正しく真すぐに暮すことを教えられ、真実な心を持つ真面目な青年であった。」(アルマ53:21)

両親が正直、高潔という徳を完全に備えているならば、両親のこの徳は子供たちに残すべき遺産、豊かな譲りとなるであろう。両親は自分たちが持っていないものを子供たちに与えることはできない。これら福音の教えの一部であるすばらしい理想と原則は、良い人格と良い人生を生み出すすべての徳と共に、私たち一人一人の中に完全に培われねばならない。そうすることにより、それらは私たち自身の一部となり、両親となる時に、それらの徳を子供たちに容易に伝えることができるようになる。箴言には次のように書かれている。「正直に歩む義人、その後の子孫はさいわいである。」(欽定訳箴言20:7) この言葉は何とふさわしく大切なことだろうか。

高 潔

「自身と他人と神に対する正直は、必要欠くべからざるものである」

親として私たちは子供に正直だろうか。子供たちは、私たちが自分の責任を逃がれるためのささいな罪のないうそを聞くことはないだろうか。子供たちが親の犯した誤ちをまねたからといって、ひどく責めることができるだろうか。両親に対する指示が教義と聖約の中に次のように示されている。「また両親はその子供たちに祈ることと、主の前に正しく歩むこととを教えざるべからず。」（教義と聖約 68：28）

子供たちに正しく歩むよう教えるためには、両親が模範を示さなければならない。夫であり妻である皆さんはその伴侶に対して忠実であり誠実であるだろうか。あなたがたは道徳的に健全な清い生活をしているだろうか。私たちは不正を支持することはできない。もしそのようなことをすれば、私たちや私たちの子供の永遠の救いを危険にさらすことになる。私たちは主の前に正しく歩み、真に正直でなければならない。そうすれば、私たちは私たちの行動すべてを左右する高い道徳観と正しい倫理感とを祝福されるに違いない。

ジョージ・エリオット³は「人生における唯一の失敗は、自分の知る最善のものに対して真実でないことである」と語った。

私たちは生涯を通じて、私たちに向けられた悪い誤解のみならず、自分にとって都合のよい誤解をも訂正すべきである。今簡単なことだと思われても、人格を形成していくうちに、このことが重要になる。というのはわずかな怠慢が重大な誤ちを生じたり、悪い習慣に結びついたりするからである。あなたは今までに商店へ行っておつりを余計にもらったことが何度あるだろうか。これはよくあることである。時折おつりを少なくもらうこともある。人は自分が誤解を受けた時には、決して注意を促す機会を逃がしはしない。正直、誠実、完全であるためには自分にとって都合のよいことであっても悪いことであっても正さなければならない。

雇主である人は従業員に対して正直であるだろうか。規則はすべての人々に適用されているだろうか。あるいは例外がある場合、それらの例外は少数の人数の人々に対しても同じように適用されているだろうか。



従業員である人は1日の仕事を誠実に行っているだろうか。私たちは昼食の時間を勝手にしつらえたり、うその口実をもうけて unnecessary 用事に出かけることはないだろうか。私たちは隣人に対して期待されている以上の奉仕をしているだろうか。それとも自分は最小限度の奉仕ですませようとしているだろうか。

商売に携わっている人は、だれも知らないからといって権利もないのに、もう少し余分に利益を得ようと請求書を水増ししてはいないだろうか。人は一見このような策略でうまく成功するようだが、だまされた人と同じように、その人自身も自分の不正直に気付いているのである。だますことも一種の不正直である。だますことによってだました本人や相手のみならず周囲の人々をも傷つけるのである。

また、教師の皆さんは正直に採点しているだろうか。生徒の努力に従って採点しているだろうか。それとも勝手な判断で採点しているのではないだろうか。チームを勝たせるために採点をごまかしたり、規則を無視することは、不正直な行為であって避けなければならない。これらの活動が人格的価値とか霊的な価値でなく、抜きん出ることと重点をおいて計画されているならば、指導に何か欠けているのである。私たちは規則や法律に触れないからと言って不正を行ない、それで自分を正当化してはならな

い。規則や法律は人を正直にすることはできない。悪い行ないは若者たちを不正直にする。小さな何でもないと思われるような行為が、不正直で不名誉なゆゆしい習慣へと発展し、道徳的な清さを失わせるのである。私たちは人の心、人格の中に、人が人生の問題に立派に対処できるためにきわめて必要な徳を植えつけなければならない。

また学生や若者たちのために、私たちは正直かつ誠実に彼らの望みや要求を聞いているだろうか。私たちは本当に彼らを理解しようとしているだろうか。また、私たちが彼らにとって必要だと思うものを与えているだろうか。

私たち教会組織の中で教える責任のある人々は、教えるように正直に生活しているだろうか。2つの標準を持ってはいないだろうか。最近若い既婚女性の教師が非常に短いミニスカートで教会にやって来たのに気が付いた。このような人は、自分自身が守っていない教会の服装の標準について本当に教えることができるだろうか。シェイクスピアはこのことを非常によく述べている。「さて、最後にいちばん大事なことは、おのれに忠実なれ、ということだ。さすればかならず、夜が昼につぐごとくにじゃな、他人に対しても誠実ならざるを得ん。」(ハムレット 第1幕、第3場)

人生において人が目的とするのは正直と誠実を模範として示すことである。人は常に自分が同意したことを堅く守り、自分自身の誤ちの報いを自ら進んで受けなければならない。正直と高潔が信頼と友情を生み、人々から絶えず好意と援助を受け、それらはしばしば充分な報いとなる。人は、他人の正直と高潔さに気付くと、自分が今まで歩いていた道から離れて、そのような誠実で頼りがいのある人の助けになろうとするものである。

何年も昔のこと、ある父親が息子に正直に関して次のようなことを教えた。この息子は小さい頃、父が他の2人と共同経営しているある店へ行った。息子は小刀がほしかったので、陳列ケースの所へ行ってそこから小刀を1本取った。そのことが父親に報告された。それを聞いた父親は子供を陳列ケースのところへ引き返させ、小刀を先の場所へ返させた。それから父親はこの仕事にはもう2人の友だちが携わっていること、そしてあの小刀の3分の2は彼らのものであることを息子に教えた。この会社から何か1つでも取ることは、息子であるこの子供にも許されないことであった。なぜなら、この会社は全部が父親のものではなかったからである。この父親は自分の仕事において正直で正しかった。彼は高潔な人であった。彼は取引をする時、自分にとってどのような犠牲になろうとも、正直を通した。彼は人

々の間で公平だと評判であった。彼にとってこの特質は金銭よりも大切なものだったのである。

人は多くの罪を見逃がすることができるが、不正直という罪は非常に許しがたいものである。私たちは人間の弱さに同情し寛大になるが、不正直な人に接するほど、信頼感をゆるがし不安にすることはない。

ジョージ・ワシントン¹⁾は正直さを強調して次のように述べた。「私はすべての肩書の中で最もうらやまれる肩書、つまり正直な人という肩書を維持するだけの堅い意志と徳とを常に持っていたい。」

救い主が十字架にかけられるまでの出来事を語らずに、正直について語るができるだろうか。イエスが祭司長や学者たちによって裁判のためにピラトの前に連れてこられた時、ピラトは救い主に罪がないことを知った。しかし、彼はイエスの命をねらって騒ぎ立てる者たちを満足させるために、正直、高潔よりも名声を重んじて、これらの人々の要求を受け入れた。

兄弟姉妹、私たちはキリストの真の教会に属している。この教会の会員であるということはすばらしい特権であり、機会であり、祝福である。私たちはすべては主が子らを導くために与えられた啓示を堅く支持しなければならない。私たちは、すべての行動、人との交わりにおいて、原則、理想、標準、誓約に忠実であろうではないか。また正しく誠実であろうではないか。私たちは自分たちが教えることに対して誠実で正しく、またそれらを完全に実践しようではないか。

そう。「われらは正直なるべきことを信ず。」また私たちは「真実、貞潔、慈善、高德なるべきことおよびすべての人に善を行なうべきことを信じている。

兄弟姉妹、私はキリストの福音の真理についてゆるぎない証を持っている。私はこの真理が私たちに導きと恵み、祝福、および人の救いをもたらすことを知っている。

私は皆さんにこれらのことを証する。私たちは隣人との交わりにおいてキリストのようであればならないことを知っている。そうすれば、私たちは模範となり、主であり救い主であるイエス・キリストの僕たるにふさわしいものとなるであろう。これらのことをイエス・キリストのみ名により、へりくだって祈り奉る。アーメン。

註 1. ロバート・バーンズ：スコットランドの詩人 (1759—1796)
2. トーマス・カーライル：スコットランドの文筆家、歴史家 (1795—1881)
3. ジョージ・エリオット：本名メアリー・アン・エバンズ、英国の小説家 (1819—1880)

什分の一の話

スペンサー・W・キンボール



5. 6歳の時に私にはしなければならない仕事がたくさんありました。その中でも一番たいせつなのは、毎日口口がしずむころにたまごを集めることでした。

私たちはアリゾナ州のサッチャーの南たんで小さな農場を経営していました。農場は南と東の方にひろがり、家はすみの方にありました。家のうらには、井戸やポンプ、風車、それに私たちの飲み水も入れておく木でできたタンクや道具小屋、それに少しはなれたところにはとても大きな材木の山がありました。

また、ぶた小屋やさく、囲い、大きなほし草の山、穀物などがありました。このようなところは、にわとりがたまごをかくすのにもってこいでした。そんなわけで、かくれているたま

ごを見つけることは、子供ひとりではたいへんな仕事でした。でも、経験をかさねることによって、私はとてもよいスパイになりました。毎日、日がしずむころになると、私は大きなかごを持ってあたりをさがしまわりました。そして、そのたまごを家に持って行きました。

ある日おかあさんは、私たち兄弟のうち小さい3人をつれて遠くに出かけて行きました。私たちはほこりっぼい道をかんとくさんの家まで歩いて行きました。ファニーはうばぐるまにのり、アリスはうばぐるまにしっかりつかまって歩きました。私はたまごのかごをもってついていきました。

歩きながら私は「おかあさん、なぜかんとくさんのところに持っていくの」と聞きました。

おかあさんは「このたまごは什分の一なんですよ。だから天のおとうさまへの什分の一として、かんとくさんにこのたまごを受け取っていただくのですよ。あなたは毎晩、たまごを家に持ってきたとき、ひとつひとつ数えるでしょう。はじめの1つを小さいかごに、あとの9つを大きいかごに入れるわね。大きいかごはお店に売りに持っていき、その分のお金をいただくのよ。そのお金でみんなのくつや、食べ物や着る物を買うの。そして小さいかごはかんとくさんのところに持って行くのよ。」

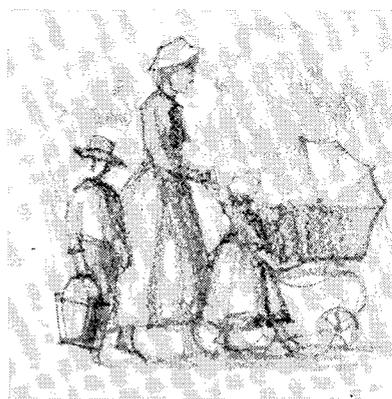
私はこのときはじめて、大好きなおかあさんから什分の一のことをおそわったのでした。

家の西がわに私たちの畑がありました。そしておとうさんが土地をたがやしている間、私は馬にのって遊びました。

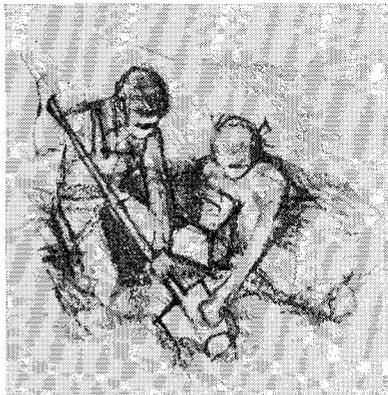
そこは土地が新しく、こえてじゃがいもがたくさんとれました。ある日おとうさんがアリスと私に「このじゃがいもは家中で食べても食べきれないから、売りたいれば売ってきなさい」と言いました。

そこで、私がシャベルでじゃがいもを掘りだし、アリスがどろをとり、きれいにしました。それを箱につめて、私の小さな赤いばしゃにつんで、プリンカーホフ・ホテルに運んで行きました。

プリンカーホフ姉妹はたいへんゆかいな人でしたが、はじ



めのうちは、このじゃがいもを売るのに少しこわい気持ちがしました。でも姉妹はよるこんで、箱ごとぜんぶ買ってくれました。そして、たしか2ドル受けとったことをおぼえています。



そのお金を見せたとき、おとうさんはこう言いました。「おまえたちはそのお金をどうするつもりだい。」それで私たちは、「アイスクリームやポップコーンやおかしを買う前にふたりでわかるよ」とこたえました。そうすると、おとうさんはまたたずねました。「什分の一はどうするんだね。」私たちは、もらったお金がほんのわずかだったので、たまごのことでおそわった什分の一のことをすっかりわすれてしまいました。しかし、おとうさんはそれを、もういちど私たちに教えてくれたのでした。それから私たちは、かじゅ園を通り、針金の囲いをくぐりぬけて、かんとくさんのところへ10セントずつもって行きました。かんとくさんは、私たちの什分の一をうけとり、りょうしゅう書をくださいました。

私たちの家にはかじゅ園があり、くだものは、どんなものでもありあまるほどたくさんとれました。でも、それはまた小さい子どもがはたらくのには、たいへんな仕事でした。ももが大きく甘くなったので、おかあさんは、冬にそなえてももをびんづめにしてちょぞう庫に入れましたが、それもいっぱいになってしまいました。そこでおとうさんは、私たちにそのいくつかを売るように言いました。私は12歳でアリスは10歳、私たちはまた売りに出かけることになりました。

私が木のてっぺんにのぼり、いちばん大きくて赤いももをいくつか取りました。

アリスはそれを箱の中に入れました。そして馬車にきちんとつんで、6マイルもあるピマまで売りに行きました。そこにはしんせつな女の人がたくさんいました。すぐにぜんぶ



売れたので、私たちは家へかえりました。お金をかぞえたら5ドルありました。そのころはクリスマスがまぢかにせまっていたので、アリスと私は大よろこびで家族みんなのために贈物をしようと話し合いました。

家についてにこにこしながらそのお金をテーブルの上のせると、おとうさんはまた私たちに、「什分の一をけいさんしたかな」と言ってくれました。そうしてもちろん、私たちは計画したクリスマスのプレゼントのお金を少しけんやくしなければなりませんでした。あせをかけた馬を牧場にもどし、にぐるまを小屋におき、くだものを入れておいた箱をしまいこむやいなや、私たちはかじゅ園を通り、囲いをこえてまたかんとくさんのところへ行きました。

高校のとき、私は自分で働かなければなりませんでした。16歳ごろだったと思います。私は、アリゾナ州のグローブという大きなこう山町に行きました。そして、そこで1日に2回の乳しぼりの仕事をして働きました。そのころ、私たちに機械はなく、手で乳しぼりをしました。私は18頭から28頭くらいの牛の乳をしぼったり、牛乳からクリームをとったり、びんにつめたり、またミルクかんやびんをあらひ、家ちくにえさをやり、そうじをしたりしました。これらのことをやり、食事と、寝るところがついて、1カ月47ドル50セントもらっていました。



私は今はいちにんまえです。何も私のじゃまをするものはありません。はじめての給料をもらったとき、私は自分にこうたずねました。「私は什分の一をはらうべきだろうか。はらわなくともいいのだろうか。私は毎日のお金を銀行にあずけるために家に送り、あずかり書と小切手帳を受けとっていました。私は小切手帳のお金を数えて、はじめての給料を什分の一としてかんとくさんに出しました。

主はやくそくされています。もし子供たちやおとうさん、おかあさんが正直に什分の一をはらえば、たくさんめぐみを受けるでしょう。私は、主がいつもやくそくを守ってくださることをよく知っています。

特別なくつ

絵：ディル・キルボーン



ジョンのくつは修理しなければなりません。彼はステーンの丘を登ったりおりたりして、くつをすりへらしてしまったのでした。その丘に、彼はおかあさんのアンナ・ウィッツォーと2歳の弟のオズボーンといっしょに住んでいました。オズボーンが生まれてたった2カ月のとき、おとうさんは死んでしまったのです。その後一家は、ノルウェーの海岸からいちばん離れた島であるフロヤから本土に移り、大聖堂のある市としてよく知られているトロンヘイムの小さなアパ

ートに住みました。2人の小さな少年とおかあさんは、美しい古い町なみをとおして、港や海へ向かってジグザグにのびているフィヨルドをときどきながめました。

ジョンがすりきれたくつを見せたとき、おかあさんは近所の人にだれかくつをなおしてくれる人はいないかどうかたずねました。その人はいい人を知っていると言い、少したつとひとりの少年が来ました。その少年はくつ屋の息子で、くつを受けるとおとうさんの

ところへ持って行きました。2, 3日して, その少年はジョンのくつをきちんと修理して持ってきました。するとくつの先の方に, 小さな見なれない紙きれがおしこまれていました。

ジョンの父親は校長先生でした。死ぬ前に, 彼は小さい息子に読むことを教えました。しかしその紙には読めない字がたくさんあるので, 何が書いてあるかわかりませんでした。

次の日, おかあさんはほかの修理しなければならないいくつかの包みをかかえこんで, 30分もある道のりをくつ屋まで出かけて行きました。

くつ屋からもどったおかあさんは, いつもよりずっと口数が少なく, それから2, 3日の間何か考えこんでいるような, 不安なようすでした。

くつ屋の息子が2番目のくつを持ってきたとき, また別の紙きれがおしこまれていました。ジョンは, おかあさんがその紙きれを何度も何度も注意深く読んでいるのを知っていました。

次の日曜日, おかあさんはくつ屋の丸木小屋にある集会に出る間, 私たち子どもを見ていてくれる人をさがしました。

おかあさんが, ジョンのくつの中に入っていた紙きれのわけをたずねにはじめてくつ屋に行ったときに, そのくつ屋が話したことを知ったのは, それからまもなくのことでした。

「私が, こどものくつの底よりももっとずっと価値のあるものをあなたに与えることができるとしたら, さぞおどろかれることでしょう」というものでした。

その紙きれは, モルモン教会の伝道のパンフレットでした。そのようなわけで, ジョンとおかあさんと弟は, 末日聖徒イエス・キリスト教会の会員となったのです。しかし, 親せきや友だちのだれもが教会に入ることに賛成しなかったばかりか, みんながアンナや少年たちに対して不親切になってしまいました。

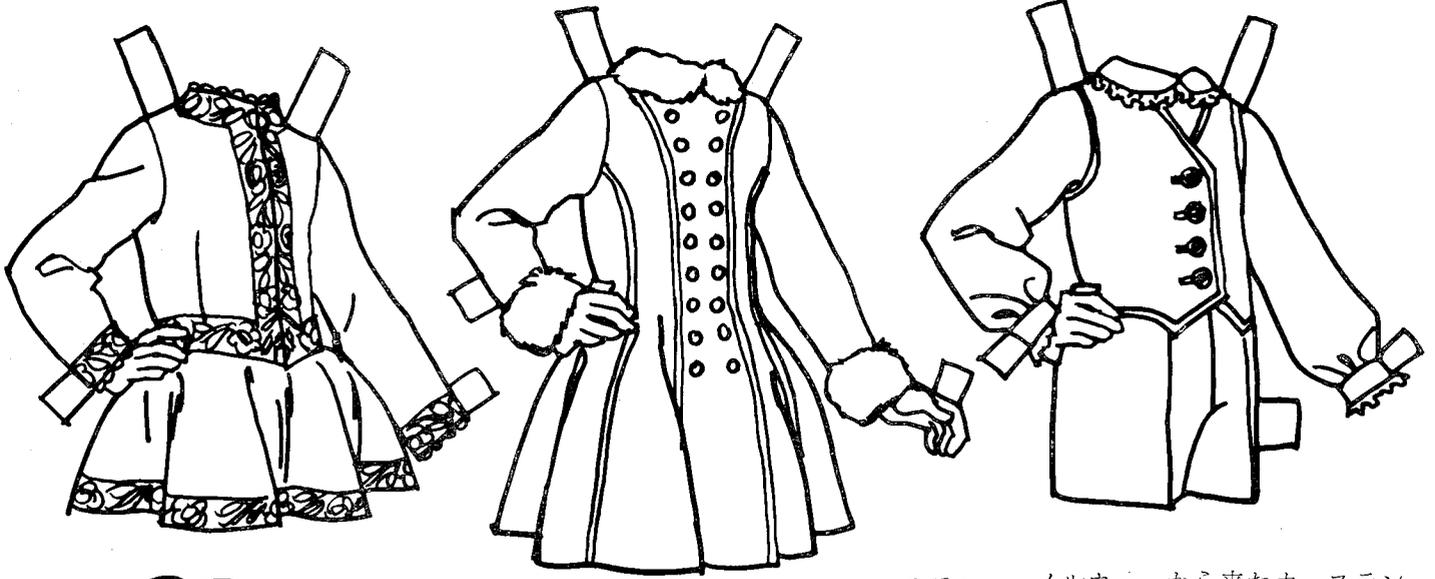
2年後, ウィットソー一家は12人のノルウェー人の聖徒たちとともにノルウェーのオスロを去り, アメリカへの長い旅に出ました。11歳のジョンは, 北海をわたったことや, 英国の中部を横切った煙っぼい旅, リバプールでの3日間の見物, 大西洋の航海, またニューヨークからユタ州のローガンへの長い汽車の旅, そしてその地に定着したことなどすべてを日記に書いていました。この土地で, ジョンは家族を助けるためにさまざまな仕事をさがしました。おかあさんは, 毎日の生活に必要なお金や息子たちの教育のために, 洋服の仕立てをしたり, そのほかできることを何でもしました。

ジョンは1921年, 彼が49歳の時使徒に召されました。当時彼はユタ大学の学長であり, またローガンにあるユタ州立大学の学校をもつとめたことがありました。彼は, 小さい時から教育を受けることが目標だったことを何度も話しました。ジョン・A・ウィットソーはいつも教会の偉大な人として思い出されることでしょう。彼は著書「陽の照り輝く国にて」(In a Sunlit

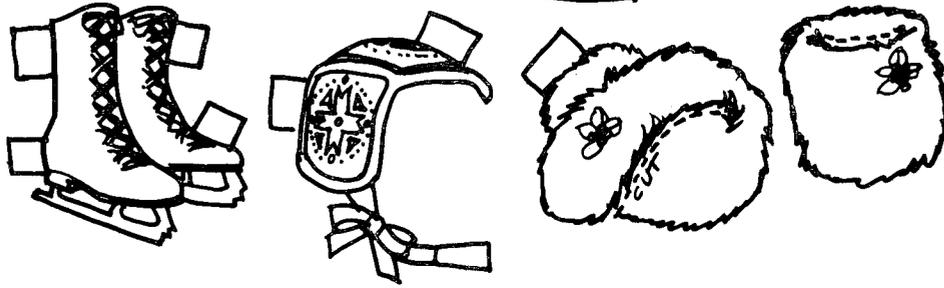


Land) の中で次のように言っています。「私にとって学ぶことは本当の楽しみでした。読書好きは私が少年時代からのものでした。一日の仕事が終わり, 書物の中の偉人と会うのをとてもうれしく思いました。また私は, 新しい知識へのとびらが開かれている若者を少しうらやましい気持で見えています。

ジョンのくつを修理してくれたノルウェーのトロンヘイムのくつ屋は, ジョンの家族に, くつ底を修理することよりはるかに価値のあるものを与えたのでした。彼は偉大な作家, 教育者, 指導者, 友として教会の助け手となったのでした。



ノルウェーから来たカーステン



バージニア・サージェント画

賞

秋の暖かい土曜日のことでした。もうすぐ何週間かの間、太陽の光があまりあたらない冬が来ます。空はオスロの町を明るい冷たい輝きでつつんでいる太陽をおしむ子供たちの笑い声やざわめきで満ちていました。

マーティン・ルッドは陽気な子どもではありませんでした。彼はほほづえをついて、だんろの中ではねたり踊ったりしている明るい炎をみつめてすわっていました。明るい炎は、部屋の暗いふんい気をのぞいてくれるようでした。しかしマーティンの顔から暗さをとりのぞくことはできませんでした。

マーティンの姉のソーニャが古いノルウェーの歌で「ピア・フィドラ」の歌を歌いながら二階からおりてきました。

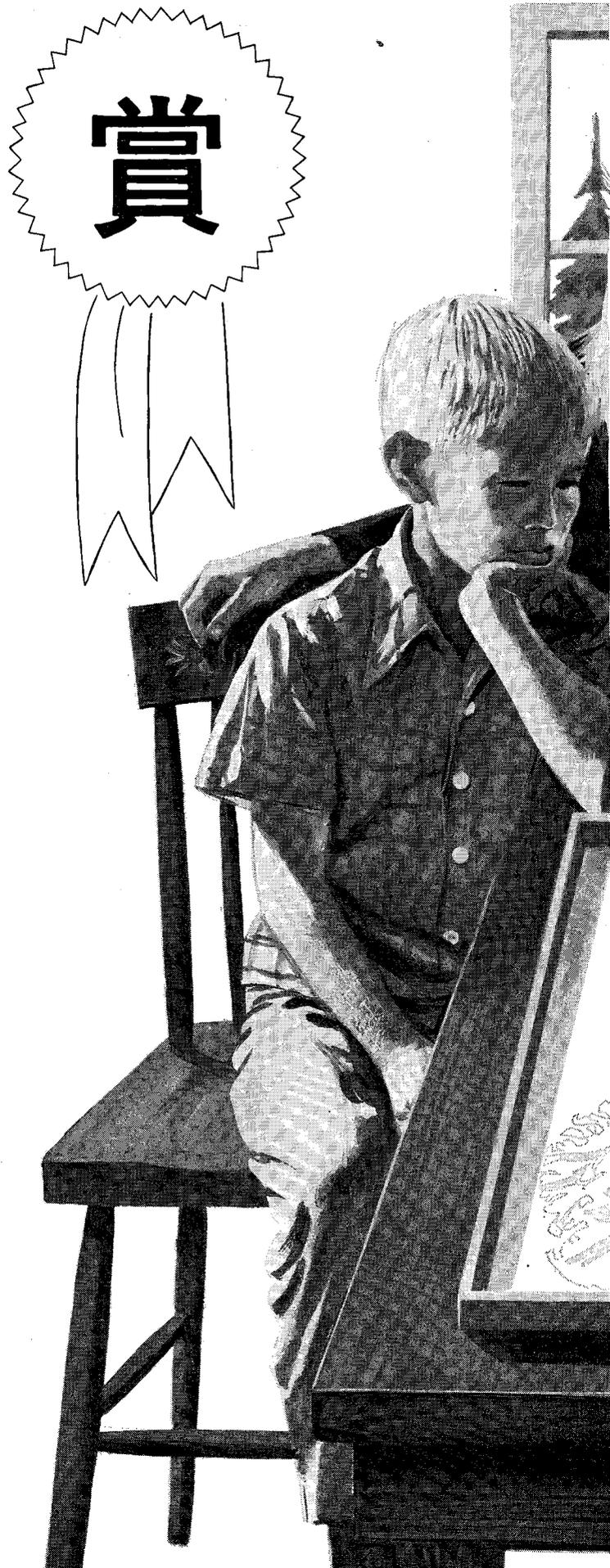
彼女はすわっている弟を見て言いました。「太陽が照ってる間は外に出なさいよ、マーティン。すぐに暗くなってしまうわよ。いらっしゃい。まるで親友を失ったような顔をしてそんなところにすわっていないで。」

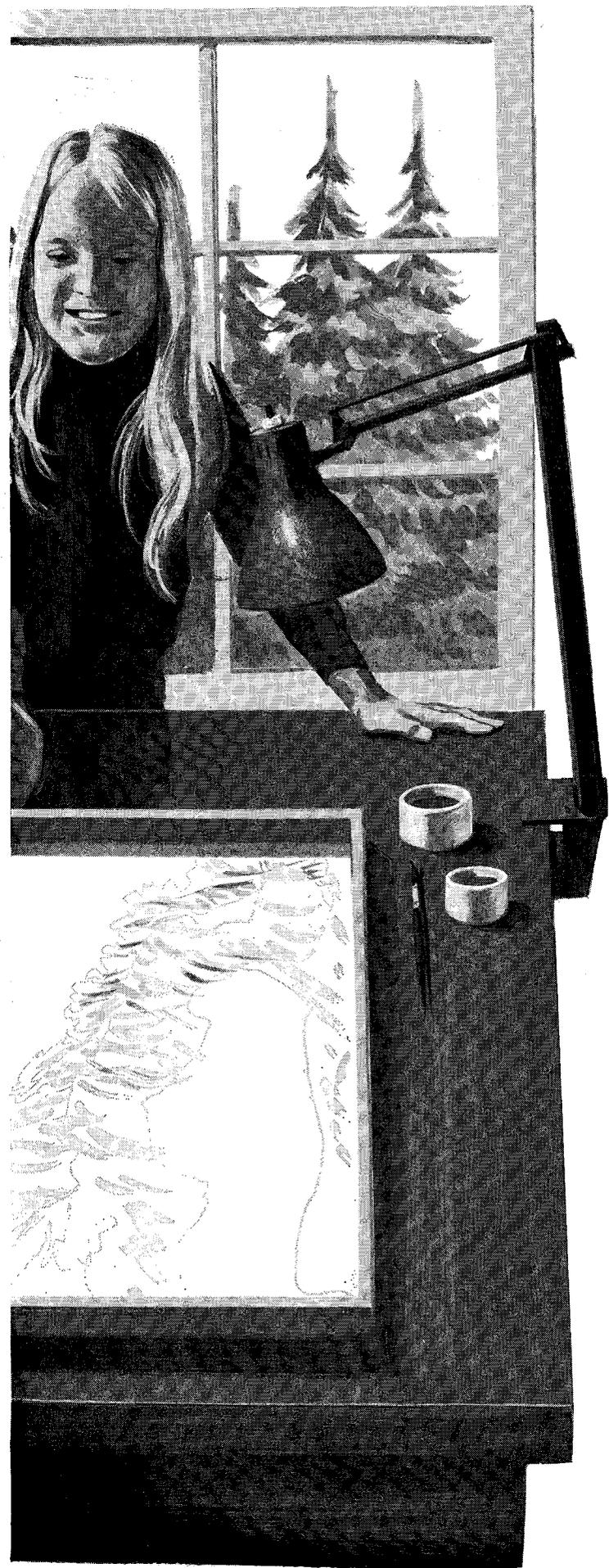
「そうなんだよ」とマーティンは答えました。それからまっすぐ立って、おねえさんの顔を見ました。

「いや、友だちをなくしたんじゃない。ただ、ぼくにひどいことをしたんだ。ぼくは彼よりも成績がよかったんだ。何のことかわかるかい、ソーニャ。アントンのレリーフ地図はぼくのよりずっとよかった。だからぼくがとってほしかった賞品のスキーは彼がもらうんだ。」

「まあ、マーティン。」ソーニャはいらいらしながら答えました。「アントンのことを喜んであげなさいよ。とにかく、どうしてわかるの。あなたの地図はきれいだわ。審査員がどう決めるか、どうしてわかるの。」

「わかるさ。」マーティンはがんとして言いました。「もしぼくが決めるんだったら、アントンに賞品をやるよ。だって、彼の地図はぼくのよりずっといい





んだぜ。完ぺきだよ。」

マーティンは部屋にもどりました。彼は一生けん命作ったノルウェーのレリーフ地図を見つめました。それはきれいな地図でした。たいへん注意深く彼は自分の国のりんかくを描いたのでした。ノルウェーがフィンランドをとりまいている北東部のカーケンスから南西部の海岸のスタバングル、そしてオスロ、さらにノルウェーとスウェーデンの国境にそって描いていきました。小麦粉と水でこね粉を作り、それらを緑色にぬりました。というのは、この地図は夏のノルウェーを表わしたものであったからでした。彼は寒い北部の地方すべてをおおっている雪を表わすのは灰色に白をまぜて使いました。

フィヨルドは、全部を作ることはできませんでした。が、大きいフィヨルド、たとえばハルダンゲル・フィヨルドやソグネ・フィヨルドなどは、でこぼこした入江の水の色を濃い青色にぬって作りました。低い坂の上にある小さい色のついた点は、夏の間はなやかに咲いている花を表わしていました。この季節は、太陽が実に6週間もしずまない楽しい時です。

地図をよく調べてみると、なおしたほうが良いところが見つかりました。しかし、なおしたあとでも、彼の地図は友だちのアントンの地図ほどきれいではありませんでした。どういうわけか、アントンはいろいろな小さなものをたくさん書き入れることを考えていたのです。アントンは、フィヨルドの暗い峡谷のところに海賊バイキングの小さい船を書いたり、また大きな都市であるオスロやベルゲン、トロンヘイム、スタバングルなどをたいへんわかりやすく表わしていました。

月曜日にマーティンは、自分の地図を荷車につんで学校に持って行きました。そこには他の子どもたちが作った地図がおいてありました。みんなテーブルのまわりに集まって、地図を調べていました。マーティンは自分の地図とアントンの地図が一番いいとみんなが

明らかにされた福音の真理とを比較するとどのように違うか。私たちの決定をするはかりとして、常に福音を役立たせようではないか。

私たちには指導者となり、この世の他の人々を導く光となる責任がある。過去において、諸々の国民は霊的な事柄に関する知恵と安定性のある人々の導きを求めた。そして今日急激な変化に直面している中で、社会は永遠を見通す立場に立って物事を判断してくれる指導者を必死になって求めているのである。私たちは福音を理解し、これを遂行するならば、特別にこの指導者の地位につくのである。

知恵の言葉や福祉計画、また若人のための偉大なプログラムがあるために私たちは特異な人々と思われている。私たちは昨日も今日も明日も、いつまでも同じにましまして変わることもなき神（モルモン9：9参照）また古代においてそうであったように、今日、神の予言者に語りたもう神を信じている点において私たちは特異である。

イエスは人生の権威者である。イエスはすべての若人が物事の真の姿、物事が現在に至った次第、および将来について知るよう望んでおられる。真の末日聖徒は道を踏み誤ることはない。私たちには聖書があり、モルモン経がある。私たちには教義と聖約、高価なる真珠として知られている現代の啓示について書かれた本がある。私たちには今日、この変動の激しい世界にあって私たちを導くために、神から啓示を受ける者として生ける予言者がおられる。私たちは監督やその他指導者の地位にある者として働く献身的な人々、および若人を導き助言することに主として関心を抱き、それを責任とする人々を与えられている。

福音を恥としてはならない。取引や労働の場において教会の標準に言いわけをつけてはならない。私はこれを知っている。私はこのことを経験してきた。私は20年間牧畜業に携わった。

そこでは国際会議、実業界の会議、地方会議があり、第一にすべき仕事は「レセプション」あるいは「社交」として

計画された宴会であった。このような会議はホテルや公共の集会場で開かれ酒宴に加わるようにするために非常な圧力がかけられた。しかし、このような宴に参加する必要はない。そしてあなたがこのような圧力に抵抗する時、人々は、あなたが自分の信じる原則に従って生活する力を持っていることに対して尊敬するというを私は証する。私が知っているようにあなたがたもそのようなアルコール飲料が必要でないことを知っている。また、私がアルコール飲料を拒否すると同じようにあなたがたもこれを拒否することができる。そして、人々が私に言ったと同じように、彼らはあなたにこう言うであろう。「私は酒を飲まない君を尊敬するよ。私もそうしたいんだが」と。

私は私たちの信じているところから生活することが大切であることを知っている。また、自分を信頼してもらいたいと他の人々に言うことができる時、それは人々に対してどういう意味を与えるのかを知っている。「人は自分のまいたものを、刈り取ることになる」（ガラテヤ6：7）という意味で私たちは自分自身の創造主である。人生においてこれを知ることほど大切なことはない。この原則は時に、刈り入れの律法と言われている。

バーナード・バルークはこの律法を次のように言った。「人間の享受できる唯一の自由とは自分自身を鍛える自由である。」すなわち、敵により奴隷制度や専政制度を押しつけられるのではなく、自分を訓練する権利を失わないように私たちは戦っているのである。

全人類にとって恐ろしい敵はサタンである。サタンは私たちを完全にしいたげるための下劣で有害な習慣をもって私たちを奴隷にしようとしている。そして、もしこれに打ち勝たなければ、サタンは私たちがこの世と永遠における真の使命を成就するのをはばむであろう。

神は教会の若人に信頼を置いておられる。また、神は若い男性をその業に召し、彼らが義務を果たし、交際する若い女性に正しい模範を示すことがで

きると信じておられる。神はこの世に住む私たちに、この地球と他の世界を創造されたと同じ力を与えたもうたのである。その力とは紅海の水が分けられたと同じ力であり、雨が降らないようにするためにエライジャが天に封をしたのと同じ力であり、また、イエスが盲人の目を開け、足なえを歩かせ、死んだ者に新しい生命を与えたもうたと同じ力なのである。

この力を持つ若人はこの世にある数多くの国民にイエス・キリストの福音を宜べ伝える準備をすべきである。また若人は自分の生き方を通して、交わる人々の中において宣教師となるように準備すべきである。イエスは言われた。「もしわたしの言葉のうちにとどまっておるなら、あなたがたは、ほんとうに私の弟子なのである。」（ヨハネ8：31）アロン神権は単なる若人のためのプログラムではない。アロン神権は来たるべき大いなることのため、また、大神権に伴う責任のために備えをするよう若人に与えられている。これは天父が若人たちの進歩に関心を持っておられ、天父の子供たちを導く若人たちの力に関心を持っておられるしるしである。一層の義と力を身につけなければ、いかなる若人といえども神権を受け、神権につける責任を勤勉に果たすことはできない。神権は人格を形成するものである。神権は若人が正しい概念と価値を持つようにと教えてる。若人が神権につける義務を全力を尽くして遂行してこそ、永遠の原則に基づくチャレンジと永遠の進歩を味わうことができるのである。このチャレンジは予言者ジョセフ・スミスに与えられたみ言葉に示されている、「神権の機能は天の能力と固く結びつき離るべからざるものにして、天の能力は正義の原則によりてのみ支配し運用し得るものなり。」（教義と聖約121：36）

すべての末日聖徒が神と永遠の生命を得る神の計画を知るようになり、昇栄の喜びを得る信仰の力を受けることができるのは、私たちが知っているように義の原則と福音に生きることによるのである。

ポール・H・ダン

長老との 質疑応答



ポール・H・ダン長老

宣教師となるには どうするか

質問：伝道に出るためにどのような準備をしたらよいでしょうか。

ダン長老：奉仕したいという気持ちを持ちなさい。宣教師は救い主の訓戒に従い、己れをむなしくしてだれかに奉仕したいという気持ちを持つことが必要である。このような気持ちを持って生活していれば、他のあらゆる事柄はおのずとこれに増し加えられるのである。奉仕したいという望みを抱き、心に正義の念を抱くことは宣教師が持つべき最も大切な特性である。その人が証と神と救い主に対する信仰とを持っており、ジョセフ・スミスが予言者であるということを確認していることが前提条件である。なぜなら、伝道地へ到着したらすぐ、宣教師はこれらのことを証ししなければならないからである。伝道でりっぱな業績をおさめている宣教師というのは多くの場合、改宗して1、2年にしかならない人たちである。私は、教会員としての期間の長さよりも、宣教師が強い証を持ち、心から主に仕えたいと望む気持ちを持つということのほうが重要であると考えている。

質問：伝道に出るための準備をする際、障害となるものがあると思われま。それは伝道に必要な費用の問題かもしれないし、また家族の反対に会うことかもしれません。このような障害を克服するにはどうすればよいでしょうか。

ダン長老：伝道の費用は高額ではあるがお

よびもつかない程高額ではない。太平洋諸島地区の伝道部では1カ月に約65ドルから70ドルの費用がかかる。また、世界の他の地区の伝道部では1カ月125ドルから130ドルの費用が必要である。教会の若い人々は自分で働いて伝道に必要な金額の半分あるいは4分の3を得る力を持っていることを私たちは知っている。事実、伝道に成功している宣教師や熱心な宣教師というのは、経費を出資してもらっている人よりはむしろ自分の力で伝道に出ている人である。そして私は、このようなことがきわめて基本的な人生の原則であると考えている。すなわち、自分で得たお金に対してはより賢明にその使い道を考えるものである。宣教師の場合も同じである。

お金のことが問題であれば、監督、長老定員会、七十人定員会が時に援助してくれることもある。利用できる手段を知らない人々はよく費用のことを問題にするが、費用のことは重要な問題ではない。

両親から反対を受けることに関しては、伝道に対する両親の反応は、それぞれの場合に依りて少しずつ異なる。両親と議論したり、要求したり、おどかしたりしてもうまくいかないし、それは主の方法ではない。それよりはむしろ、両親とよく話し合い心の交流をはかることが最良の策であると私は考える。私はよくこれは感情的な衝突、たとえば「あなたがそう言っても、私はこうします」といったような強迫めいた言葉使いから来る感情のもつれが問題であると思う。そして、このような感情のもつ

れはただ問題を大きくするだけである。伝道とは個人的に成し遂げるものである。友人、特に監督やステーク部長が若い人たちのためにしばしば中に立つこともできる。また、教会に反対している非教会員の父親や母親と話し合う場合にも、ホーム・ティーチャーの援助を得ることが望ましい。

どの地の伝道部長も、両親の支持を得ない若い少年や少女が一度伝道に出ると、その両親が変わり始めるということに気づいている。このような両親にとって息子や娘がかえって身近に感じられるようになる場合がある。伝道は家族をはなればなれにするのではなく、むしろ家族の結びつきを強めるのである。私にとって最も胸おどることの1つは両親にとっても伝道が経験の一部となったために、福音に逆らっていた両親、あるいは非教会員、教会に不活発な両親が何人活発になり福音に興味を持つようになったかを知ることである。不活発であった父親や母親が私のところに来て、家庭内に起こったことについて私に感謝したこともある。しかも、普通このような両親は神殿にはいる備えをしていた。このようなことはあなたが知っているより以上にひんぱんに起こっているのである。

質問：姉妹は伝道に出るべきでしょうか。教会はこれを奨励していますか。また姉妹たちの場合、長老たちと同じ位効果がありますか。

ダン長老：姉妹宣教師は多大な貢献をして



いると思う。私は過去3年間、この伝道部を管理して特にこの印象を強くした。

教会は若い男性が伝道に出るのをすすめているほどに若い姉妹が伝道に出るのを一般的に奨励していない。若い姉妹たちにとって最も重要にして基本的な召しは結婚である。歴代の大管長はそのように言っている。しかし、若い姉妹が伝道に出ることを望むならば、私たちは彼女が派遣されるようにできる限りのことをするつもりである。長老たちが19才で召され、姉妹の場合は21才で召されるのはこのためである。

姉妹宣教師の伝道も長老と同様に効果がある。私は長老が姉妹宣教師をしのぐとか姉妹宣教師が長老よりすぐれているとか言うことはできないと考える。しかし一方が他方よりも効果をあげる場合がある。たとえば、姉妹宣教師は長老たちが決してはいることのできない家にしばしばはいることができる。そして事実、姉妹宣教師は長老たちが戸別訪問に費やす時間よりもはるかに長く訪問先にいる。たぶん、人々は姉妹たちを少し別な見方でみているのだろう。

姉妹宣教師には1、2不利な事柄がある。それは、姉妹たちには神権がないのである仕事を長老たちに頼らなければならないことである。

姉妹宣教師は長老よりも寛大であり、相手を理解する態度があるようである。また姉妹宣教師はやる気を起こすこと、主に時間を捧げることに長けた長老たちよりもはるかにチャレンジを受ける機会が少ないようである。

質問：宣教師の1日のスケジュールについて説明して下さい。また、なぜ宣教師はそのようなきびしいスケジュールに従う必要があるのか教えて下さい。

ダン長老：詳細は地理的、文化的条件によって多少違うが、伝道部はすべて基本的にはほとんど同じ形式のスケジュールで行なわれている。ニューイングランドでは、宣教師たちの起床時間は午前6時である。宣教師はこの起床時間に1日のスタートを切り、心と体と霊を活気づけるのである。宣教師がその日1日の業を行なう準備をする前に心身両面にわたってなすべきこまごました準備がたくさんある。必要なことをすべて行なうためには午前6時から始めるのがよいようである。この時間から1時間ないし1時間半は身じたくをしたり、部屋を掃除したり、朝食をとったりその他一般的なことをする。

7時30分から9時30分までの2時間は個人学習や共同学習に費やす。私たちが要求していることだが、私はほとんどの宣教師は同僚と机について1時間共同学習をし、外国伝道部の場合は言葉の勉強を行なっていると思う。宣教師たちはレッスンを練習し、聖典やフラネルボードの使い方、戸別訪問の時の話し方などを検討して、レッスンの進め方を研究しているので、いつも同じことのくり返しという状態をさけることができる。換言すれば、宣教師たちは創造することを学んでいるのである。個人学習

の時間は標準聖典に関する専門知識の修得に費やされ、また「基督・イエス」、「信仰簡条の研究」、「奇しきみわざ」の勉強をしたり、これらの書物と関連した学習プログラムをいくつか研究したりする。

9時30分になると宣教師はアパートを出る。時間厳守ということは宣教師の生活において非常に大切なことであるので、私たちは時間通りに宿舎を出るように強調している。これは宣教師を規律正しくし、自分を系統だてるのに役に立つ。個人的な不平は宣教師が自分の生活をうまく管理できないところから生じるのであり、うまく準備計画している宣教師には不平は生じない。それから、2時間半の間、宣教師はパンフレットを配ったり、いわゆる「戸別訪問を行ったり、紹介された人を訪ねたり、その他の伝道活動を行なう。

昼食後、さらに紹介された人を訪問し、戸別訪問をし、家庭集会のために人々と約束したりする。宣教師たちは午後5時までには再び夕食をとるために宿舎へ帰る。どの伝道部でもそうであると思うが、私たちは宣教師たちが適切な栄養をとるように強調している。

午後6時30分から9時30分まではレッスンを教えるのに最も効果的な時間である。これは求道者と前もって決めていた約束の時間に会い、また家族にレッスンを教える時間である。教会は家族を単位として教えるように強調している。ご承知の通り、過去において、ある婦人が教会に加わったがその夫は加わらなかった。あるいは夫が加



わって妻が加わらなかったというような問題をかかえていた。それで、私たちは家族をばらばらにしないで、家族全員を教会に連れて来るように努めている。そして、父親を含めた家族全員にレッスンを行なうよう強調している。宣教師たちは夜、家族にレッスンをしてよい成果をあげている。

夜の9時30分後の宣教師の生活はふつう人と変わらない。もちろん、レッスンはずんでこの時間を過ぎるという例外もあるが、宣教師たちは宿舎へ帰り、10時30分までには床に就く。午後10時30分から午前6時まで睡眠をとれば、宣教師は元気で、活動的で、また効果的な働きができるということがわかっている。もしこの睡眠時間をごまかして、この定められた一定時間寝なかったりあるいは寝すぎたりすると、だらだらし始め、何をしてもおっくうになり疲労し、インフルエンザやかぜにかかりやすくなる。

私たちはこれらの規則を厳格に守るように言っている。それは私たちが軍隊の軍曹のようになろうとするからではなく、このような規則は、宣教師が最善をつくすためにまた霊的に肉体的にそして精神的に備えをなす上で最も効果的な方法であるからである。教会はこの規則については140年間の経験の有している。そういうわけで、これは試行錯誤的な方法ではなく、実際的な方法である。

質問：では、伝道期間は2年が最もよく、伝道は決して容易なことではないとおっし

やるのですか。

ダン長老：そのとおり。伝道とは実に骨の折れる仕事である。私たちはあらゆる神権定員会において、また世界中のあらゆるモルモンの家庭にあってはこの困難な伝道を支持すべきである。

宣教師に与えられる大きなチャレンジの1つは、普通ではない生活環境の中で生活しなければならないということである。普通の環境という点について私は男女関係のことを今考えている。私たちは宣教師たちに、宣教師はデート、手を握ること、キス、ダンス、水泳、射撃、オートバイ、スキー、スケートをしてはいけないと言っているのである。そしてまだこの他にもしてはいけないことがある。

そこで宣教師は新しい生活をするようになる。宣教師は自分の霊的な状態を維持するために、ある人々の心をかきたてたりするようなことを行なうことができない。悪魔が策略を持ってこれを利用することは、私が今ここにすわっていると同様に確かなことである。それで、宣教師には自己を抑えて行動する事柄が2、3ある。

すなわち、生活状況が通常ではないという束縛、宣教師が誘惑を受けるとわかってい地域につれだそうとしている悪魔の誘い、自分が行使していくべき自由意思を束縛されることなどがそれである。

若人が家庭で持っている問題、すなわち道徳、言葉、神聖を汚すような、言行、俗語、服装、負担、悩みあるいは感情的な問

題は、伝道に出る際にきわだったものになる。自己の良心と生活を一致させるような手段を講じなければ、長所は長所となるが弱点はますます弱点となっていく。

そして、私たちが伝道について教えるべきことはこれであり、私たちは弱点が長所となるように若人を助けるべきである。私たちは教会で「いかに克服するか」について学ぶために多くの時間を費やしているということを感じ射する。多くの問題は人が自分自身を発見した時に解決する。多くの問題は人が主と十分に話をし、交わることができる時解決するものである。自分が福音に対する証を持っていることに気づく時、多く助けがもたらされるのである。私たちが家庭で制限を受けていたことはすべて伝道においても制限を受けるということを銘記しなければならない。また、それを認識することが、問題を解決するにあたって最初に取るべき段階である。

質問：あなたがここで伝道部長をしておられる間にごらんになったなかで、現在の伝道プログラムの発展と最近変わったことについて、気づかれたことを少し話して下さい。

ダン長老：一般的な原理は伝道活動が140年前に開始されて以来変わっていない。主は福音をあらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるように、私たちに神聖な命令を与えたもうたのである。(モルモン経の見証者の証および黙示14：6参照)これは



ご承知のとおりである。しかしながら、主は優先順を決められた。すなわち、予言者により指示されたように、福音は最初にヨセフの支族にのべ伝えられ、それからユダヤ人と他の支族の中に伝えられるのである。福音はすべての人々のためにある。そしてこれが根本概念なのである。

数年前、教会は現在よく知られている6課にわたるレッスンを新しく使い始めた。このレッスンは宣教師たちが心の正直な人を見つけるのに非常に効果がある。過去においてはこれとは異なったレッスンプランを用いていた。それで、宣教師たちは30課から60課にわたるレッスンを行ない、時には100課以上のレッスンを行なったのである。数年前までは、2、3年間にわたって家族に教えることはめづらしいことではなかった。そしてレッスンとレッスン、この間でフェローシップが行なわれていても、宣教師たちはこのような人々が心から福音を知りたいと思ってはいないことを知っただけであった。それで今まで行なわれていたレッスンの主な要点だけを拾って6課のレッスンにし、これを教えることによって福音を聞きだしている人々とそうでない人々をふるい分けるほうがよいと考えられた。

ふるい分けるということは主があらゆる人々に注意を払われたい、また私たちが注意を払わないということではない。そうではなく、私たちは主のみ言葉に誠実に耳を傾ける人々を最初に求めているのである。6課にわたるレッスンはそのように行なわ

れている。よく準備し、訓練され、「みたま」を鋭く感じる心を持っている宣教師はその人が福音を聞きだしているのか、あるいは交際や仲間になってもらうことを望んでいるだけなのかを2、3時間のレッスンで見分けることができる。

ここで率直に言わせてもらおうが、私たちは5課あるいは6課のレッスンで福音を教えようとはしていないのである。わずか5、6課のレッスンで福音を教えることなど決してできるものではない。福音は生涯にわたって学ぶべきものであり、すべてを学んだ人はだれひとりとしていないのである。福音をすべて知らないからといって活発な末日聖徒になれないわけではない。行ない証は調和すべきものではないだろうか。教会の力は教会員一人一人の証に基づいている。私たちが6課にわたるレッスンで行なおうとしていることはきわめて単純なことである。私たちは教会を知らない人にジョセフ・スミスが予言者かどうかを知るためひざまずいて祈り求め、神の導きを通じてジョセフ・スミスが予言者であることを知らせようと努力しているのである。もしジョセフ・スミスが予言者であることを主から来る内なる確信によって心の中に理解するならば、他のすべてもそのようになるのである。そして、私たちは人にまた私たち自身にもこれから後の生涯、教えることができるのである。またこれは神権および他のあらゆる教会プログラムが意図していることである。



質問：あなたが伝道を通じて得られた経験の中で最も価値ある経験はどのようなことですか。

ダン長老：1つだけ選び出すことはむずかしいが、主と自分自身とを見出した大勢の宣教師を見ることが最も価値ある経験といえることができる。また、それらの宣教師が自らの知識と証によって非教会員に福音を宣べ伝えているという祝福を第2の祝福と考える。私の居間にすわり、心を動かされて涙ながらにここまでいたったことを教会と私たちすべてに感謝している人々がいるということは、金や高い地位あるいはその他のものに換えられないことである。せんじ詰めれば、人々が主の助けによってこの福音が真理であることを知ることができるようになる、あなたが持っているものを誠心誠意で単に分ち合うというだけのことである。私は福音が真理であり、神が生きておられることを知っている。教会にいる私たちすべては事実、主から信頼されている僕である。あなたがたはだれもこのことを一瞬たりとも疑う必要はない。私たちは求めているすべての人々に喜びと平和をもたらす福音を日々、そして生涯にわたって言葉と行ないを持って宣べ伝えるように召されているのである。

七十人最高評議員であるダン長老はニューイングランド伝道部で伝道部長の務めを終えて最近帰還した。これはダン長老が伝道に出ようと考えている若い人々にとって最も関心のある問題に答えたものである。

こ数日間、私は力に溢れた偉大なメッセージについて考えていた。それは「……主なるわれは、彼〔ハイラム・スミス〕の心実直なる故に彼を愛す。また彼はわれの前に義しきことを愛する故にわれ彼を愛す…」

（教義と聖約 124：15）である。義しきことを愛する者であることは何という祝福であろうか。今日の社会において私たち多くの者が、妥協、合理主義、主体性のない追従、および自己弁護の中に生きている傾向があるように思われる。何でも受け入れ、自分に都合のよいものを愛することが義を愛することに取って代わってきた。ある人々は安全な道は義の道と滅びへの道との間にあると思いをしている。またある人々は、完成への道は妥協の道をまっすぐに進むことだと確信しているように思われる。

先日ある母親が大学生の息子の行ないのことに、満足気な穏やかな調子でこのように言っていた。「ちっ

とも勉強していないみたいなんです。でも学園紛争に参加していませんからね。」窃盗罪で投獄されていたある囚人が、もう1人の囚人をさして、自分の方が優位だといわんばかりの調子で次のように言った。「少なくとも俺はあいつほどは悪くない。あいつは第二級殺人罪でここに来てるんだ。」またある万引きは、他の万引きが洋服を盗んで有罪を宣告されたのに比べて、自分は帽子を一個盗んで懲戒を受けただけだったので、ほとんど罪悪感を感じなかった。「私は1日に煙草2箱をのむが麻薬はやっていない」と言う人は、どんな気持で言っているのだろうか。

世にならわせ、何でも試みさせようとする世間の圧力は、年配の人にも若者たちにも現実には大きな力を加えている。12、3歳の子供たちの中にさえ麻薬の使用者がいるという事実を知る時に、多くの人々は驚くのである。もっと驚くべきことは、麻薬を使うように若者たちを誘う時に用いられるか

けひきである。私はこの悪い遊びに足を踏み込んでいた若者から、次のような言葉が一般的に使われていることを聞いた。「麻薬は君が生きていなくなっちゃいけない汚れた世の中から逃がられる楽しいものだよ。」「麻薬は孤独な人間の友だちだ。」「麻薬を飲めば物事をわきまえることができるよ（他人に惑わされることもないよ。）」「麻薬は仲間だ。」

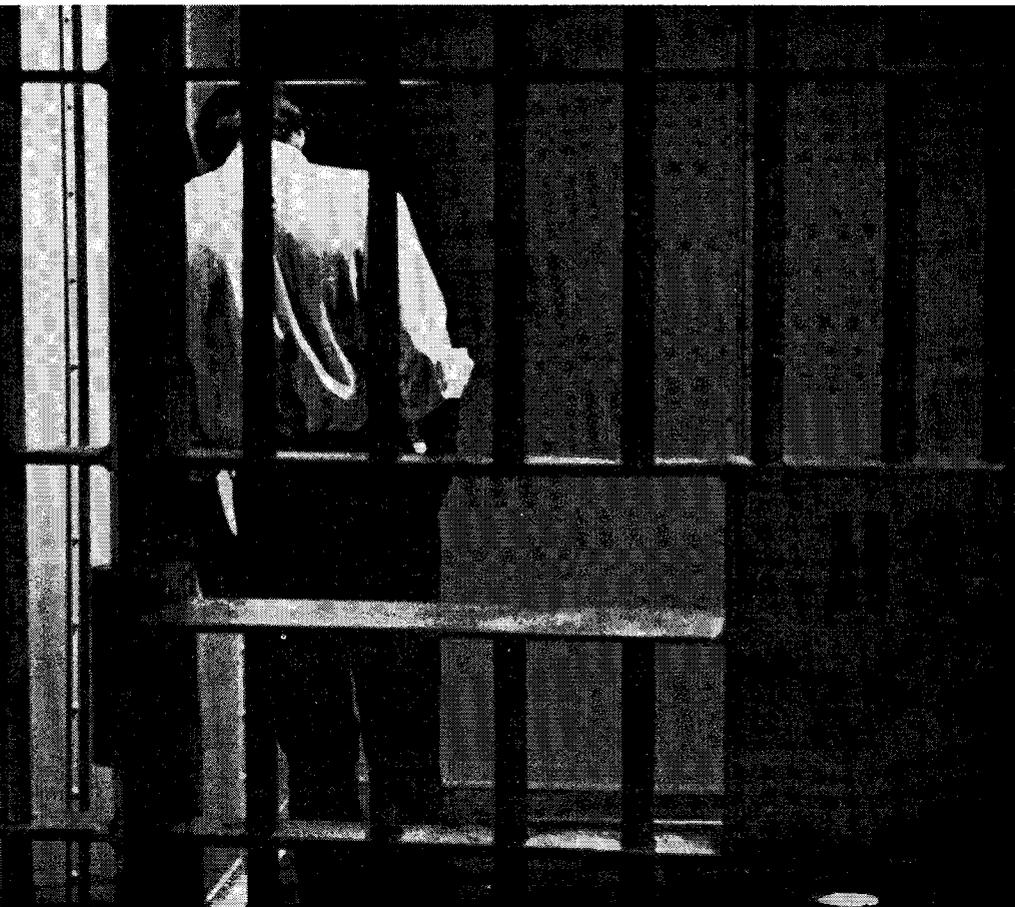
私は全身全霊をこめて申し上げたい。これら心身を傷つける道は悪への道である。若人たちは、麻薬を飲み幻覚症状を起こすと、美と滅びの間を安全に歩めると信じこまされているのである。

多くの若者は麻薬を常用するために無気力になっている。麻薬は人間の価値観をうばうものである。麻薬を使用している若者は、培養基のようなものである。

麻薬常用や他の社会問題に目を向ける時、皆さんがその兆候よりもその原因に注意を向けるようお勧めする。

義を愛す

十二使徒評議員会補助
マービン・J・アーシュトン



義を愛す

若者が自分、あるいは友人に向かって「なぜ麻薬を使用してはいけないのだろうか」と質問する時、彼は的はずれの質問をしているということが出来る。彼が本当に知りたがっていることまた知らなければならないことは、「一体なぜ私は興奮剤や鎮静剤などを欲しがらなければならないのだろうか。虚偽の邪悪な世界に今逃避したくなるほどの不幸が私の生活にあるのだろうか」ということである。もし私たちが親としてあるいは友人として、このような若者たちに、麻薬が悪いことであり不道徳なことであることを忠告しても、なぜ彼らが現実とひきかえにこのような悪い代用品へと方向転換したのかを理解しようとしなかったら、若者たちは結果的には麻薬にふけり、麻薬が大きな不幸の原因であるとは気付かないのである。私たちは愛する者たちが、この現実生活から離れ去って、見知らぬしかも危険な麻薬常用の世界へ向かう理由を知らなければならない。健康で立派な快活な若者たちが薬で自らの行動を制御するようにしむける原因は何なのだろうか。家庭や学校、仕事、教会にある、逃避しないでいられないような不快なものとは何だろうか

私たちがマリファナやLSD、スピード、ヘロインなどの問題に直面しなくとも、他の逃避手段に直面するであろう。なぜなら、私たちの中には兄弟姉妹、あるいは親、友人、教師として彼らが求めている信頼や愛を与えるこ

とができない人がいるからである。また私たちの中にあらゆる人が欲している家庭における安堵、尊敬、関心を生み出そうとしていない人がいる。しかも、このような人たちこそ教会が教えている以上に、愛に満ちた家庭生活を必要としているのである。

若い人たちに義を愛することについてよく教えることができる場所は、幸福な家庭において他にない。私たちが父親、母親、兄弟、姉妹が心から互いにいたわりあう、好ましい人間関係の備わった家庭の雰囲気を作り出すならば、若者たちは決して他の「仲間」を求めないであろう。

両親である皆さん。日常生活の緊張感を払いのけるために麻薬が必要であるという考えに若者がいつもさらされることのないようにしましょう。麻薬に関して恐れを抱かせたり、麻薬を使用することが恥であると思わせるより、麻薬に関する実際的な知識を絶えず強調すべきである。私たちは子供たちが愛をなくしたり、わがままにならないように育てなければならない。また私たちは子供たちの能力に応じて責任を与え、子供たちの出会う困難から守るために過保護にならないようにしなければならない。ある父親や母親は確かに風をまいて、つむじ風を刈り取っているのである（ホセア8：7参照）。家庭生活の真の目的を固く持ち、一致の種をまき、喜びを刈り入れようではないか。

誘惑やチャレンジに遭遇する時、それはその若者ばかりではなく両親にとっても苦しい試しの時なのである。しかし若者たちが、忍耐強く神の道を求めることによってのみ豊かで幸福な生活がもたらされるということを学ぶために、この時ほど家庭での愛や理解、受け入れることが不可欠な時はないのである。

私たちはもう一度神の道がまっすぐであるという偉大な真理を確認すべきである。この道は私たちに安全をもたらすばかりではなく、幸福へ、また永遠の進歩へと導くのである。

このまっすぐな道を進むことについて話す時、私は2、3年前ユタ中部にいた頃に1人の友人と共に経験した事柄を決して忘れることができない。彼はアメリカライオン狩りが趣味であった。他の仲間や、頼りになる馬、銃、よく訓練した犬などを連れて、彼はよくライオンの足跡を追ったり、ライオンを捕獲するために使う木を探したりしたものであった。ある日私が彼の仕事場を訪れると、物置きに大きな1匹の猟犬がいた。私は「すばらしい犬じゃないか」と言った。すると彼は「もう出ていくんだ。あいつのじゃまをすることはできん」と答えた。そこで私は「どうしたんだね」と尋ねた。

「私はあいつが小犬の頃からライオンを追うように訓練した。あいつは私の考えていることを理解した。私たちが最近3日間の狩りに出掛けた時、あ

いつは鹿やコヨーテ、最後に出くわした数羽のうさぎにも目をくれず、とうとうその日は狩りの機会をのがしてしまった。あいつはライオンの跡をつければならぬことを知っていた。私たちの仕事はライオンを捕えることなんです。そりゃ、あいつを売んなら安くしか売れませんかね。」

私たちは行く手を横切る麻薬のような気晴らしによって、何としばしばよくない道へ誘われることだろうか。私たちは、もっと先に進めば大きな目的が達成できるのに、手近なところで捕えられそうな「うさぎ」を求めていることがないだろうか。

麻薬の問題は今や深刻であり、教会もこの問題に対して大きな関心をいできている。家族、親、教会役員はこれらの害悪を避けたり処置するために、あらゆる努力をすべきである。麻薬使用者は、この広範な世界のほとんど一集団をなすほどにまで増加しつつある。麻薬使用者の集団に属している人々は自分たちを社会の他の人々と区別しようとして年令にかかわらず、奇抜な衣服、髪型、その他の型にはまった事柄をする傾向がある。

しかし彼らが極端な行動で攻撃的になったり、私たちの忍耐の度を越えない限り、私たちが彼らを傷つけないとしても、ただ彼らを私たちの集会や一般の友人関係から拒否することで傷つけるにすぎない。私たちは正しい生活をしている多くのの人々を犠牲にしてまで

悪事を働く者たちを極端に宣伝するような誤ちを避けるようにすべきである

同時に、私たちは大きな病根となっているものに対して、むやみに反応を示さないようにすべきである。事実教会内外を問わずすべての若者に麻薬のことを教えてきたきらいがある。私たちは知らず知らずのうちにたくさんの広告によって、若者たちに麻薬を得る手段や場所を教えていたのである。

教会は、麻薬問題と戦い、処理しようとしている立派な人々や組織を認め支援している。監督や他の神権指導者は、麻薬使用者が治療と社会復帰の手段を見出せるよう援助しなければならない。

人々が麻薬に好奇心を持ち、それを使い始めたら、福音の基本的な原則について暖く愛情をもって教えることにより、その家庭や個人的な生活を強めるよう助けるべきである。若者たちは決断力のある指導を待ち望んでいる。私たちは迷える人々を、彼らが現在いる場所から引き戻さなければならない。私たちは他の人々にも絶えず義を選び主の道を歩むよう教えなければならない。

麻薬は非常に深刻な問題であり、教会は主のみ手にあつてみ心通りに動く道具である。けれども私たちはたとえそれが深刻な問題であろうとも、大きな罪悪の兆候にすぎない問題にとらわれて、永遠の最も価値ある道から離れるべきではない。

崇高な行ないの標準は常に義に対する愛に基づいている。いかなる形であっても悪は決して幸福へ導くことはない。天もなく地獄もなく、妥協と便宜主義のみが唯一の幸福の道につながるものであるなどと信じこませようとする人々に私たちは気をつけなければならない。サタンは実在しており、力がある。麻薬の常用はサタンの道具の1つである。サタンは人をおとそうとしその狭小さによってすべての人類を神から遠い存在にしようとしている。だまされないようにしなさい。神は生きたものである。神によって私たちはすべてのことを成就することができる。私たちは麻薬の罪や正しい標準をまげるといふ罪にまき込まれてはならない。それよりもむしろサタンのすべての道避けるようにしなければならない。

天父は私たちが義を行なうことに大きな関心を持っておられ、私たちが天父の助言を求めらば、私たち一人一人にしろしをもって祝福したものである。私たちがただ正しく導いて下さるよう願うだけで、主が具体的に示して下さると約束したもうたことを私たちは知っているだろうか。教義と聖約第9章8節には、主の約束が記されている。

「されど見よ、われ汝に告ぐ、汝心の中によく思い計り、その後願うこともし正しからば汝願わざるべからず。願うこと正しからば、その時われ汝の

義を愛す

心を内に燃やさん。これによりて汝にその正しきを感じしむ。」

兄弟姉妹、私たちが日常生活において決定を下す際に神の導きを求めないならば、私たちは自分の受ける祝福を危うくし、またもっともらしい理屈をつけて、確実に安全な道から離れようとしているのである。

主は私たちが主により頼み、主の道に従って歩むならば、私たちが幸福を求める時に助けを与えることを約束された。豊かな生命は私たちが主により頼む時に自分のものとなる。私たちが日々自分の持つ神権の召しを全力を尽くして遂行し、才能を分ち合うならばサタンは私たちに対して何の力も及ぼすことができず、私たちは天父の力によってすべての正しいことを成しとげることができる。アルマ書26章12節の中で、アンモンは彼の兄弟アロンに戒めを与え、安全をもたらす生活のあり方を示した。「私は自分が取るに足らない者であることを知っている。私の能力は弱い。それであるから、私は自分のことを誇らないでただ私の神のことを誇る。それは神のたもう能力によって何事もすることができるからである……私たちはとこしえに神の御名にこの誉を帰して讚美する」私たちは永遠の幸福な生活をするためには、イエス・キリストの福音に従って生活しなければならぬ。

最近のある総大会の後、心配そうな様子をした母親が私の所へやってきて

このように言った。「私は『いかなる成功も家庭の失敗を償うことはできない』という言葉の意味を知りたいのです。」その人が反抗的で道をふみはずした娘のために、心に重荷を負っているのを知って、私はその言葉の意味を教えた。私たちが互いにあきらめた時家庭の中に失敗が生じ始めるということ私を確信している。私たちは努力しなくなった時に失敗する。私たちが愛、忍耐を経験しながらも勤勉に努力しているならば、たとえ一見不和であり、進歩していないように見えても、家庭の失敗を招くことはない。息子、娘、母親、父親のことを見放す時に、私たちの失敗が始まるのである。

2、3日前、私はアリゾナ州グランド・キャニオンのふもと、スーパイン何人かのレーマン人の友人を訪問するといううれしい責任を割りてられた。峡谷の小道を進んでいる時、私は人気がない奥地に逃避する所を求めて旅行している数人のヒッピーの若者たちに出会った。彼らの話によると、彼らはすべての人、すべてのものから離れるために、麻薬と基本的欲求との力を借りてこの地へ来、この地にきてくるとまた別の土地へ行くということであった。「だれも僕たちのことを気にかけませんし、正直言って僕たちも家庭のことは気にしません。」彼らはこのように言い残して行つた。私が今言った言葉は彼らが言った言葉通りではないということを皆さんに申し上げたい。

私がある時1人の若者が次のように話したが、今麻薬を常用している若い人々にも同じことを申し上げたい。「君たちが今持っている物をすべて背負い3、4時間でグランド・キャニオンから歩いて出ることができるように、この麻薬常用からも抜け出すことができるんだよ。君たちのことを気にかけている人や、君たちが正しい道にひき返すことができるように助けたいと思っている人がたくさんいるんだよ。」

若き友人たち、また麻薬常用の魔手その心痛に捕えられ、途方にくれている両親に引き返す道があることを申し上げたい。あなたがたは引き返すことができる。望みはある。

私は今日、美に対する愛が天父の力と守りをもたらすものであることを証する。私たちは天父の備えられた道に安全を見い出す。私たちが天父のすべての戒めを守り、麻薬のような害悪から逃がれ、安全への道を真剣に求める望みを心に抱くよう祈る。

私たちが協力して、若者たちが日常のすべての誘惑と戦い、避けるように援助する時、願わくば次の聖句を思い出すように。「……人はすべて、聞くに早く、語るにおそく、怒るにおそくあるべきである。人の怒りは、神の義を全うするものではないからである。」

(ヤコブ1:19-20) 天父が私たちに義を教え、義を愛するようになされたまわんことを、イエス・キリストのみ名により祈り奉る。アーメン。

結婚は永遠に存続すべきもの として定められた

十二使徒評議員会補助

ジェームズ・A・カリモア長老

愛する兄弟姉妹、私は今日、皆様方の前に立って、私の胸中にある思いを話す時、皆様方が信仰と祈りを持ってお聞き下さるようお願いする。

あらゆる教会員は今も永世にも結ばれる神殿結婚を目標としなければならない。なぜなら結婚は神が定めたもうたからである。(教義と聖約49:15参照)結婚は戒めである。結婚は神の命令により制定された。主は言われた、「また、われ誠に汝らに告ぐ、何人にも結婚を禁ずる者は神より聖職の按手任命を受けたる者にあらず、そは結婚は神の人に定めたところなればなり。この故に、人各々一人の妻を有つことは義し。而してこの二人の者一体となるべし。すべてこれは、この世の

造られたる目的に適わんためなり。すなわち、この世のいまだ創られざる前に人の創られしに従いて、人間の数のこの世に充たされんためなり。」(教義と聖約49:15-17)

主の戒めを成就することにおいても結婚は主として家族を育むためにかわす神聖な関係である。

結婚によって子供をもうけ、それにともなってもたらされるうるわしい家族関係は人生の目的を成就しているということになる。もしこのことが正しく行なわれるならば、私たちは家庭において今も永世にも結ばれる神殿結婚をした母親と父親とを見るであろう。父親は神権を尊び、義によって管理するであろう。父親と母親は互いに愛しあい、子供たちを愛するであろう。子

供たちは互いに愛し尊敬しあい、その両親を愛し尊敬するであろう。家族はみんな教会の責任を活発に果たすであろう。主は神殿で永遠に結び固められる結婚を永遠に続くものとして定められた。これは主の計画なのである。ジョセフ・スミス大管長は次のように言われた。「末日聖徒が理解している結婚は永遠に続くものとして定められた聖約である。それは永遠の昇栄の基礎である。なぜならば、もしそれがなければ、神の王国において、永遠の進歩がないからである。」(救いの教義)

「だから、神が合わせられたものを人は離してはならない。」(マルコ10:9)この聖句から明らかなように、主が定めたもうた方法で行なわれた結婚は解消されるべきではない。



結婚は永遠に存続すべきものとして定められた

軽々しく結婚の誓いをたてているのを見ることは、真に悲しむべきことである。今日、教会において離婚の数が増加していることを教会幹部は非常に懸念している。

教会員の離婚率は一般社会の離婚率よりも相当低く、また神殿結婚した人の離婚率は市民結婚した人のそれより低い。しかし、驚くほど高率なのである。

離婚は一般的に、伴侶のどちらか一方あるいは双方が福音に従った生活をしなかった結果である。私はモーセの時代に、最終的に離婚が認められたのは、これと同じ理由であったのだろうと考える。このことに関して、救い主はパリサイ人に答えて次のように言われている。「モーセはあなたがたの心が、かたくななので、妻を出すことを許したのだが、初めからそうではなかった。」(マタイ19-8)

従って、現代の教会員は、モーセの時代にそうであったように、福音の律法を完全に守らないために、決してそのように意図されているわけではないが、必要であると考えられた時に、離婚が認められるのである。

もし結婚する男女が福音の標準と原則に基づいて結婚生活を築くならば、処理できないような問題は起こらないはずである。夫婦のどちらか一方あるいは両者が福音の標準をおろそかにし始める時に問題が生じて来るのである。結婚は神聖な関係である。そして教会のりっぱな会員であるならば、結婚が主として家族を育むためにかわす神聖な関係であることを知っているはずである。結婚生活において、当時者同志はこの他の重要な希望と計画について互いによく理解すべきである。

マッケイ大管長は結婚の誓約を結ぶことの重大さに関して、次のように言われた。「結婚を単なるロマンチック

な気まぐれや利己的な目的に応えるためのものとし、困難や誤解が生じた際には別れてしまうというような簡単な約束ごととみなすのは、過酷な罰を受けるに値するほどの罪であり、特にそのような離婚によって子供たちに苦痛を与える場合、それは大きな罪悪である」(ブレイン・R・ポーター著「末日聖徒の家族」より、P.402-403)

離婚の原因と考えられる最も一般的な事柄を以下にあげる。おそらくこれらはそうした問題を未然に防ぐうえで役立つであろう。性格の不一致、姦淫、金銭問題、虐待、不正直、福音に従った生活をしない、不貞、神権を尊ばない、蒸発、絶え間ない口論、冷淡、飲酒、ヒステリーなどである。

性格の不一致は非常にありふれた言葉となってきており、この言葉でいろいろな問題を正当化しているようである。確かに、正当化される場合もあるが、では性格の不一致とはいったい何であろうか。これは利己主義をあらわしているにほかならないのではないか。私たちはわがままな態度をとっていないだろうか。一致が見られない時に、自分を愛するように、私たちの隣人を愛しているだろうか。(ルカ10:27参照) 私たちは自分の好ききらいを相手の好みにあわせるように努力しているだろうか。本当に福音に従った生活をしているならば、性格の不一致という問題はずっと少なくなるであろう。

マッケイ大管長は性格の不一致について次のように語った。「互いの愛の輝きに浴してぬくぬくと過ごしてきた2人にとって、彼らの人生における愛の光をぼんやりさせてしまう誤解と不和の雲を見、日毎そのような生活を続けるのは実に悲劇である。その後には闇が来て、夫婦の目にある愛のきらめきは鈍くなるのである。愛の輝きを取

りもどすために、正しい言葉を使い、良い行ないをしようとむなしい企てがなされる。だが言葉と行ないは誤解を生じさせ、怒りに満ちた口論は、直りかけた傷を再発させる。そして、かつてひとつに結ばれていた心は真っ二つに引き裂かれ、その溝はだんだん深くなっていく。このような破綻を迎えた時、人は離婚を求めるのである。」(「福音の理想」インブループメント・エラ1953年、P.469)

私は男性が女性に対して肉体的虐待を加えることを知ってショックを受けている。1951年10月に開かれた大会でマッケイ大管長は次のように言った。「私は男性が女性を虐待しているなどとは想像もできない。また、女性がそのような扱いを受けるに等しいふるまいをしているとは考えられない。たぶん世の中には夫を怒らせる女性もいるだろう。しかし、男性は暴力に訴えたり、あるいは神聖を汚すような言行で感情を爆発させることは正当化されないのである。確かに世の中にはけだもののような男性がいる。しかし、神から授けられた神権を有する者は、自己の品位を下げるようなことをしてはならない。」(「福音の理想」P.476)

結婚生活に破綻をきたす一般的な原因は、無関心、自分の気持ちをすすんで表現しようとしめない態度、情愛のなさなどである。最近、ハロルド・B・リー副管長は神権指導者会で次のように言った。「私は兄弟たちに申し上げたい。あなた方とあなた方の奥さんの間、また私と私の妻の間に起こり得る最も危険なことは無神経さである。すなわち、女性にとって、私たちが彼女たちの関心事に興味をいだいていないと感じたり、私たちがいろいろな方法で愛や思いやりを示してくれないと感じたりすることである。女性は幸福になるために愛されまた同様に男性を愛

さなければならぬ。」(十二使徒地区代表セミナー, 1970年12月12日, P. 6)

純潔の律法を軽々しく取り扱ったり救い主が教えられた道徳を汚したりすることはゆゆしき問題である。神殿の推薦状を持ち、神殿結婚をするに値すると考えられていた神権者や姉妹がひんぱんに姦淫や不義その他性に関する罪を犯すとは信じられないことのように思える。

今日、大ぜいの女性が家庭を離れて働きに出ている。最初からそれが意図されたわけではないが、それにより多くの家庭が崩壊している。

マッケイ大管長は次のような重要な指示を男性に与えた。「結婚の誓約をたてこれを守るために主の宮において神聖な契約を結んだ人が、あいきょうを振りまく若い女性の美しい顔や容姿に気を許してのぼせるようになったために自分の妻や家族と別居するようなことになるならば、彼は神との契約に対する裏切者である。国の法律が不正に解釈され、これにより離婚が認められるかもしれないが、彼には神殿で再婚するための推薦状を得る資格はないと考える。」(「福音の理想」P. 473)

離婚の理由がたとえ何であろうとも一般に、最もひどく傷つけられるのは子供たちである。子供たちが人生に対して備えをなすのに必要欠くべからざる根本的要求があまりにもひんぱんに奪い去られている。

どのような子供も3つの根本的な事柄を持つ資格があるとマッケイ大管長は言った。その1つはりっぱな名前、2番目は安心感、3番目は進歩の機会である。(末日聖徒の家庭 P. 406) 離婚によって以上のいずれもが機会をせばめられるのである。

カリモア姉妹と私が結婚するために神殿に行った時、私たちはジョージ・H・プリムホール学長(ブリガム・ヤ

ング大学)の事務室に呼ばれた。彼は私たちにある指示を与えてくれた。私たちはこの言葉をずっと心にとめてきた。プリムホール学長はこう語った。

「あなた方の『エデンの園』が砂漠とにならないように潤いを与える4つの泉はゆるぎない信頼、常に助言をおしまないこと、不断の譲り合い、交際中の新鮮な気持を持ち続けることである」

どのような結婚生活にとっても大切なことは、徹底した信頼、すなわちすべてのことを信じることである。真の愛から生まれた信頼を維持しているならば、お互いの誠実さを疑ったり、問いただしたりすることは決してない。ある人はこう言っている。「社会は信頼の上に成り立ち、信頼はお互いの誠実さの中にある確信の上に成り立つ。」

互いに相談し合い、2人で決定をくだすということは幸福な結婚生活にとって大切なことである。家族全部を含めての話し合いはりっぱな家庭のきずなを強める。

行なわれることすべてに関して互いに相談し合うことは結婚生活のちぎりを強くするであろう。

私は結婚生活の中で、「不断の譲歩」よりも必要なことはないと思う。私たちは譲り合うことを通じて相手に近くなる。自分自身の誤りを認め、相手に徳を認めたとえで改善に努める時、私たちの結婚生活はより強固なものになる。

ヘンリー・ワトソン¹は次のように言った。「私は戦いに和解を求め、栄光を譲りわたす。憎悪が生まれ、苦悩が生まれ、愛が愛たることを制止し、人生が死の影を映した谷間に下降する時、私はすべてのことを譲りわたす。しかし私は、真理と正義に関しては一歩たりとも譲りはしない。」

求婚時代の新鮮な気持について、マ

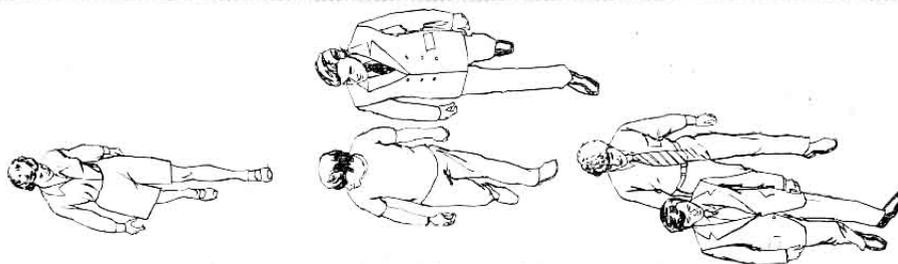
ッケイ大管長は次のように語った。「幸福な結婚生活の種は若い時代にまかれる。幸福は聖壇から始まるのではない。幸福は若い時代、求婚時代から始まるのである。」(「幸福への道」1957年, P. 49)

求婚時代は聖壇で終わるべきではない。結婚生活について関心を寄せ、いつも親切な行動とおもいやり、また思慮深い態度によって求婚時代の気持を毎日持ち続けることは何と大切なことであろうか。アーチボールド・F・ベネットは、このことを家族の昇栄に関して彼が書いた本の中で、次のようにみごとに書き表わしている。「結婚式は永遠の求婚時代の始まりではなく、求婚時代の終わりであると考えて結婚式場にやって来る男女があまりにも多い。家庭生活にはいろいろな重荷がふりかかるが、だからこそ求婚時代の甘い日々以上に優しい感謝の言葉や礼儀正しい行ないをするよう気を配ろうではないか。「ありがとう」、「ごめんなさい」、「どうぞお願いします」などの言葉を毎日、家庭の中で言わなければならないのは結婚式の後であり、試験に会う時なのである。これらの言葉が祭壇に2人を導いたあの愛をたえず心に燃やし続けるのである。男性は結婚指輪をはめたからと言って冷酷になったり無関心になったりしてよいというわけではない。また女性もだらしなくなったり、おこりっぽくなったり、不愉快な態度を示してよいというわけでもない。」(「末日聖徒の家庭」P. 236)

結婚の誓約が神聖に保たれ、私たちがその永遠の祝福を享受できるようにイエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。

あなたはどこへ行こうとしているのか

永遠である将来のためにそなえると同時に、今の世の機会のためにそなえよ。



全 世界に住む愛する兄弟姉妹。
数週間前、私は何人かの人々と共に、混雑した空港へ行き多くの人々が様々な目的を果たそうと往来している場所を通り過ぎる時、一体この人々が心を寄せているものは何であろうかと考えていた。その時、よく引用される質問が心に浮かんだ。あなたはどこから来たのか。あなたはなぜここにいるのか。あなたはどこへ行こうとしているのか。ここにあげてある質問の1つを変えてみよう。あなたは「本当に」どこへ行こうとしているのか。これに加えて、私たちは次のように質問する。「実際、あなたは何を望んでいるのか。」と。

私たちは、何をすべきかについてまた、何が重要な事柄かを深く考えず、煩雑なことに時間の大半を費やしている。

時折私たちは、行なわなければならないと思った事柄に心を傾け、行なった後実際には以前思っていたほど意味がなかったことに気づくことがある。

このようにして年月が経ち、まだ若いと思っても思いのほか年を取っていることに気づくようになるのである。

ふり返って考えてみると、今年もすでに4分の1が過ぎ去った。その大部分を私たちにとってあまり意味のない事柄に従事しながら。このことを考える時、私たちはジョン・ラスキンがみた夢を思い出す。

ラスキンの夢はこうである。「私は夢を見た。私が子供の頃のことを……パーティ、そこでいろんな遊びができた。……賢く親切な主人のもてなしを受け……子供たちは部屋や庭で自由に遊び、その日の午後をどのようにして楽しく過ごそ

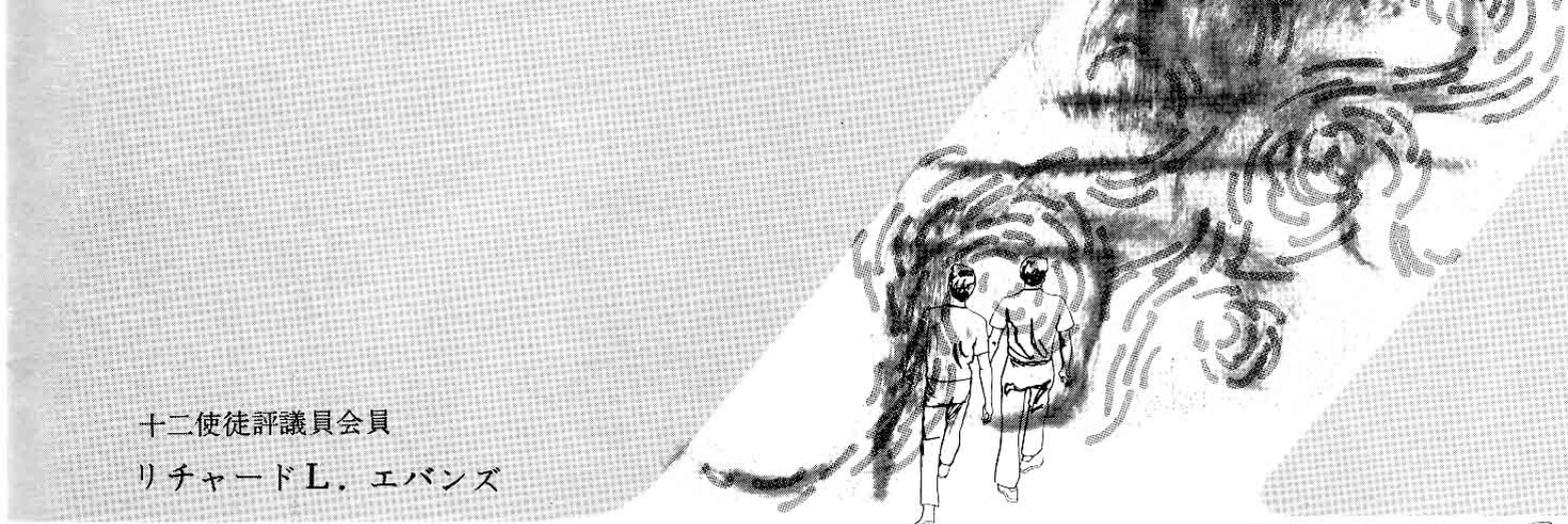
うかというような心配はいらなかった。……そこには音楽があり……あらゆるおもしろい本があり、遊び場があり……そして、おいしそうな食物が山と積まれたテーブルがあり、子供がほしいと思うものは何でもあった。……しかし、その最中2、3人の「大人びた」子供たちがいすに打ってある飾りびょうに目をとめ、子供たちはこれを引きぬこうと一生懸命になった。しばらくの間、子供たちはみんな、飾りびょうを抜くのにやっきになっていた。引き抜いてみても、子供たちは満足しなかった。すると、みんなは他の子供が持っている飾りびょうを欲しがるようになった。そして、最後に、最も「大人びて」いて「分別のある」子供が、今日の午後は飾りびょうを手に入れただけで他に何も得たものはなかったと言った。……とうとう子供たちは飾りびょうほしさにけんかを始めた。飾りびょうは、1本たりとも持ち出すことが許されないことを知っているにもかかわらず。

そして、ああ、何ということだ、「一番多いのはだれだ。ほくは君と同じくらい持っていなければ、安心して家に帰れない」という有様になった。

ついに私は、その子供たちのお互いののしりあう声で目がさめた。そしてひとりこう考えた。

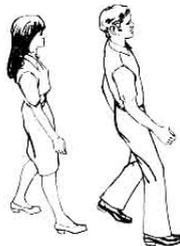
「子供たちの夢にしては、何とばかげた夢なんだろう。……子供たちは決してこんなばかげたことはしないのに。こんなことをするのはおとなだけだ。」

ところで、私はラスキンが語ったような夢をみたことがない。けれども私は幾度となくこのことを追求し、祈り考えて



十二使徒評議員会員

リチャードL. エバンズ



きた。

愛する若人の皆さん、そして愛する年配の方々、あなた方は本当にどこへ行こうとしておられるのだろうか。そして、本当に何を望んでおられるのだろうか。

数カ月前、私は愛する旧友の葬儀の席で話をした。私は思うのだが、この人はたいした財産もなかった。しかし私はこの人の孫が次のように言うのを聞いた。「週に1度、祖父は孫たちもふくめて家族全員を集めました。そして祖父は家族に福音を教えてくださいました。決して否定的なことを言ったことはありませんでした。祖父はいつも信仰と勇気を示しました。そこには『世代の相違』は全くありませんでした。」

そして、私はこの短くて、いつ終わるとも知れないこの世での命が尽きた時、私の孫たちが心から私のことについてこのように言ってくれるとしたら、これは何という祝福であり心やすらぐことであろうかと思った。

私はまた、私たちが住んでいるこの世界、読み書きを覚える機会のない、何億という人々が住んでいる所について考えた。そして次に自らの機会を投げ出し無視している若者が住む所についても思いをはせた。多くの教育、能力、技術を要求されつつあるこの世界において彼ら若者は一体自分がどこへ行くと考えているのだろうか。

愛する若人の皆さん、毎日毎日が永遠の一部分である。今ここで起こっていることは永遠に重要なことなのである。

私はあなた方に心からお願ひしたい。それはあなた方がいずこにあっても、永遠である将来に対して備えをなすと同時

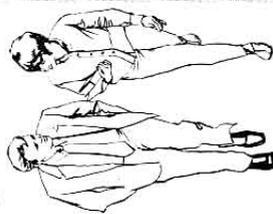
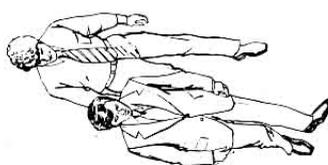
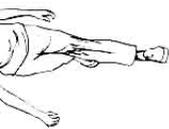


に、今、ここであなたを待っている機会に対して備えをなすことである。ジョージ・エリオットはこのように語っている。「機会を利用できぬ者にとって機会とは何なのか。」

自然の律法と神の律法、そして命の律法は1つであり、同じものであり、絶えずその効力を有している。私たちは律法の世界に住んでいる。冬のアとは春が来る。私たちはこれを信じていることができる。太陽は明日の朝、再び時間通りに

は言った。「あらゆる罰の中で中最もひどい罰は、良心の法廷で罪ある人が無罪の判決を言い渡されることである。」

さて、私たちは定められた道に従って生活していくべきである。これはただ、神に喜ばれるためだけでなく、また、両親を喜ばすためだけでなく、ただ、私たち自身のためである。なぜならば神が与えたもうたどの戒め、どの要求も私たちの幸福、私たちの健康、私たちの平安と進歩のためにあ



輝き照らす。私たちはこれを信じていることができる。

道徳の律法も霊的な律法も完全にその効力を有している。私たちはこれをも信じているのである。これらの律法を確信していれば、私たちの行なっている生活がどのような結果をもたらすかわかるであろう。神の戒めを無効にする権威や力が単なる人間にあると言わせてはならない。また、実際的かつ必要欠くべからざるものにして生活の一部であり、健康、幸福、平和を人にもたらし、また正直、徳、清さ、卓越、その他人生に関するあらゆる善きことを人にもたらす戒めを拒絶する権威や力が人にあるなどと、だれにも言わせてはならない。

愛する若人の皆さん、もしだれかがあなたに、結果を見ずとも神の与えたもうた戒めを拒絶することができるというならば、あなたはその人が真理を知らず、またあなたに真理にあらざることを言っているのだということがわかるであろう。

神が与えたもうた、すばらしい機能をもつ心と身体は、この世での寿命を全うしなければならない。感覚器官を麻痺させたり鈍くしたり、あるいは身体の機能を損傷したり酷使したり、注意を向けないこと、すなわち身体を破壊したり精神を鈍らせ、病気に陥らせる物質を使用することは愚かで邪悪な行ないである。人間にとってよくないものは用いるべきでないし、また行なうべきでもない。

命の律法に反するとこうむるものは、外的な罰ばかりでなく、精神的、霊的な罰、心の苦悩もある。ジュゼッペ・

るからである。愛する若人の皆さん、神が与えたもうた戒めを利己的と思うくらいよく守りなさい。

今、外的な面と共に精神や霊の公害にも注意を払わなければならない。また、金もうけのため、あるいはその他の目的で、印刷物の中に退廃的な絵や写真を入れ、人の心に退廃的な感情をうえつけようとする好色文学の制作者、それをもって私たちを食物にする者に注意を払わなければならない。

私たちが放っておく限りとどまるところを知らない悪をくつがえすために、あらゆる方法を利用すべきである。

私たちは、無邪気で正直な子供たちを安全に守る責任がある。肉体上の公害を一掃するために立ち上がるばかりではなく、精神や生活様式、道徳への公害を一掃することに関心を払おうではないか。肉体をむしばむ公害に関心を払うよりも人の精神や霊をむしばむ公害に関心を向ける方が急を要する。

私たちが生活していく上で関心を払うべきことが2つある。それは予防の力と悔い改めの力である。

なぜ、命の律法に反する方へ走るのか。なぜ、健康を害し不幸の禍中へ向こう見ずに飛び込むのか。なぜ、良心に逆らって生活するのか。私たちが正しく生活することによって防ぐことができる失望や浪費、後悔について考えてみなさい。だれも結果を無視することはできない。セシル・B・デミルはこう言っている。「私たちは戒めを破ることはできない。ただ、戒めに対して自分自身を破滅させるだけである。」予防の力についても考え、生活し、教えようではないか。マル

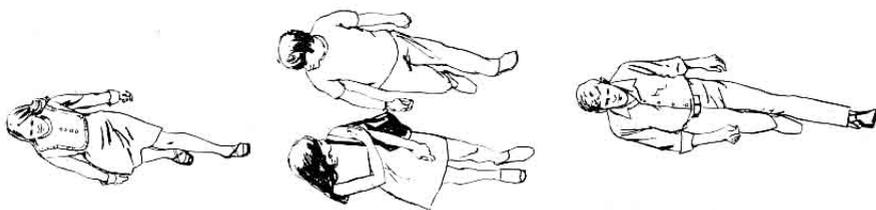
クス・アウレリウスは「正しくなければ、行なうな。真実でなければ、言うな。」と語った。

しかし、私たちがそのように行なうことができなかつたならば（天父は私たちが失敗しないように助けられるが）、私たちはすぐに心から悔い改めの道へ立ち返ろうではないか。

悪の荷は重く、背負うことができない。リー副管長がこ

き世へと行くのである。これが天父の計画であり、目的である。このため私たちがどこへ行こうとしているのか、また、なぜそこへ行く方法を教えている福音が必要なのかということが問題である。

主が過去と現在にわたって予言者を通じて啓示を下したまい、また私たちがひとり放っておかれなことを神に感謝する。神は今までに私たちの従順さにも増して、それ以上の



の世で最も重い荷は罪の重荷であると言われるのを聞いたことがある。若いも若きも、しなければよかったと思いがながら、重荷を背負って歩く苦悶の姿を見るのは不幸なことである。

しかし、悔い改めの原則が与えられていること、そして私たちが理解し、真心からのものである限り私たちの悔い改めを受け入れて下さる天父に感謝する。主は次のように言っておられる。人「……すでにその罪を悔い改めたる者は赦され、主なるわれもはやこれを忘るべし。罪を悔い改めしや否やは、見よ、彼は自らこれを告白しその罪を捨てれば、その悔い改めたることはこれによりて知るを得べし。」（教義と聖約58：42—43）

私たちはこれを信じることができる。だれもが行きたくないと思うところへあなたを連れて行こうとする道から逃れなさい。そしてあなたを平安、自重、清さ、そして良心へと導いてくれる道へと進み行きなさい。

私は天父がつくりたもうた計画と目的の予定表を知ろうとは思わない。しかし、私たちが究極の目的とするところへ行くために立ち返り、歩き始める時は、今をおいて他にないということ私には知っている。

私たちは本当にどこへ行こうとしているのか。私たちが再び、生きる救い主の降誕を祝う季節を迎えるたびに、神の計画と目的を思い起こすことであろう。神の計画と目的によれば、時いたりして私たちはこのはかない世を去り、無限の可能性をもち、愛する者と永遠に交わるという真の終わることな

ことを語られてきた。もし私たちが神に仕え、神の戒めを守るならば、神はさらに多くのことを知らされるであろう。

世界中に住む愛する友人の皆さん、私は皆さん方に証を述べる。神は生きておられ、過去も現在も未来も変わることなき天父なる神は自分の形に人を創造され、私たちを死から贖い、命の道を示すために、御子、私たちの救い主をつかわされた。神の目的は人に不死不滅と永遠の生命をもたらすことである。もし私たちがそのように望み行なうならば、私たちがすべては救いと昇栄を得ることができる。このため諸天が開かれ、全き福音が回復されたのである。

私は救い主が生きておられることを知っている。私はこの世に住むあらゆる人々の上に主の平安と祝福があるように祈る。救い主、イエス・キリストのみ名により願ひ奉る。アーメン。

1. ジョン・ラスキン：イギリスの芸術評論家、作家(1819—1900)「小さな飾りびょう」
2. ジョージ・エリオット：マリー・アン・エバンスの筆名、イギリスの小説家(1819—1880)「牧師の生活からの一場面：アモス・パートン」
3. ジューヴィニル：デンマス・ジュニアス・ジュベナリスローマの風刺詩人(60—140)「風刺」xiii
4. セシル・ブラント・デミル：映画監督、作家(1881—1959)「1957年、ブリガム・ヤング大学卒業記念講演」
5. マルクス・アウレリウス・アントニウス：ローマ皇帝(121—180)「瞑想録」第7巻 17章68行目

新しき年を迎えて



東京ステーキ部ステーキ部長

田中健治

愛する兄弟姉妹の皆さん、この末日の日にまた新しき一年を迎えるにあたり、心からお喜び申し上げます。過ぐる1年間この幼児期のステーキ部にあって、神様の御業に励んでこられた全ての兄弟姉妹の努力に心から感謝申し上げます。

新しい年と共に東京ステーキ部も飛躍の年となるべく一層の努力をしなければなりません。しかし、大きな信仰が実ろうとする時は必ず、サタンの働きかけも大きく強くなり、私たちの前に立ちはだかります。それに打ち勝つためにはサタン以上の力を信仰で示し、御意に従って歩む心意気が必要です。

今、私たちの周囲を見まわす時、明らかにサタンの仕業である事柄が何と多いことでしょうか。多くの不道德的な問題（特に性に関する事柄）は麻酔をかけられ、詭弁をもって論じられ正当化されています。私たちは「召さるる者」としてそれらのサタンの策略に打ち勝つ精神を持ちつづけなければ「選ばるる者」にはなれないのです。なぜならば「人々の心甚しくこの世に属けるものの上にある」からです。正しき事柄と悪しき事柄が時代の

流れにそって変化することはありません。創世の以前から正義は正義、不義は不義であります。私たちは次の戒めをよく心にとめる必要があります。「神権の権能は天の能力と固く結びつきて離るべからざるものにして、天の能力は正義の原則によりてのみ支配し運用し得るものなり」（教義と聖約121：36）

神に生きておられ福音は神の生き方そのものであり、永遠の幸福を得るためにはこの福音の道に従わなければなりません。

誠に「現世は、人間が神に逢う用意をしなくてはならぬ時期」（アルマ書34：32）なのであります。

ステーキ部長会は、永遠の生命を得ようと望む全ての人々の心を尊重し、1人たりともおろそかにしたくありません。私たちは心から望みます。常に何処にあっても「永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたとまたあなたがたかわされたイエス・キリストとを知ることであります」（ヨハネ17：3）と云えますように。

どうか今年も兄弟姉妹全てが神と共に歩み、発展の年となりますように心からお祈り致します。



愛する兄弟姉妹 新年おめでとございます

昨年は私たちが深く感謝する年でありました。なぜなら主が多くの面で祝福なされたからです。福音はすべての原則と教えに従って生活しようとする時、つねに、私たちがすばらしい祝福で満してくれます。

今、迎えた年を眺めてみますと、過去にはなかった大きな業があります。この年を生涯で最も豊かで重大な年にせねばなりません。しかしそうするために、何ができ、何をしなければならぬでしょうか。この質問に対して、救い主は答を与えていらっしゃいます。マタイ伝6：31、33、7：21で主は仰っしゃっています。

「だから、何を食べようか、何を飲もうか、あるいは何を着ようかと言って思いわずらうな。まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。わたしにむかって『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行なう者だけがはいるのである。」

たしかに、私たちは毎日学び主の言葉を求めねばなりません。そして、私たちの力で働き主の御旨を果さねばなりません。これは、あらゆる誠命に沿って生活することであり、これが真実であると知っています。

この年に、皆様の上に主の祝福があるようお祈りします。主が生きたまひ、ここは今日地上での主の教会であることの証しを皆様に述べます。イエス・キリストの御名によって。

伝道部長 清水まさる

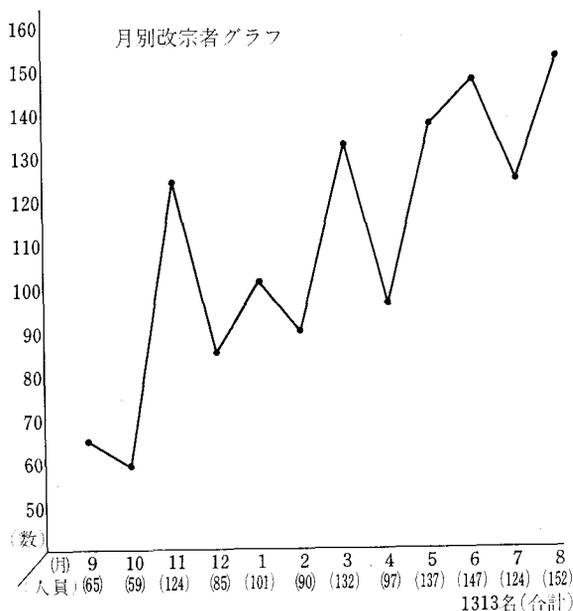


伝道部長会、組織される

1971年9月20日、タナー副管長の特別大会の時に、清水伝道部長を補佐する2人の副伝道部長、第一副伝道部長、鈴木正三、第二副伝道部長、牧瀬十二郎兄弟が支持されました。

写真説明

左、鈴木第一副伝道部長
中央、清水伝道部長
右、牧瀬第二副伝道部長



あれから一年

万博が終って1年目の8月、中央伝道部に152名の兄弟姉妹が誕生しました。1970年9月から71年の8月迄の1年間に、1313名の改宗者があり、前

年の633名に比べ、200パーセント強と、急速な発展をしました。これからの1年間、伝道とフェローシップに全力を上げて、神様の為に働きましょう。特に新しく入って来る兄弟姉妹には、暖い愛あるフェローシップの手をさしのべて下さい。





真の証を 得るには

日本西部伝道部

伝道部長 渡 辺 驥

「さて私モロナイは少々言いたいことがある。私は、信仰とはまだ見ない物事を望むことであると世の人々に教えたい。それであるから、あなたたちは自分がまだ見ていないからと言って疑ってはならない。信仰の度を試してからでない目で見るような証明が得られないからである。」(イテル12:6)

主は熱心に求める者に神が生きてましまし、イエスがキリストであり、福音が真理であることを証したもう。

昨年春、私は沖縄を訪れ、そこで真理の証を得て喜びが体全体に表れている夫婦子供に会った。以下が彼らの真の証を得たいきさつである。

「以前のことで、私はある友人からモルモン経をプレゼントされました。私は早速その本を読み始め、そのうちにその本に書かれていることが真実であると信じるようになる。間もなくレッスンを受け始めました。そしてレッスンを受けたら私はバプテスマを受けたいと思いました。しかし問題がありました。私はどうしてもタバコをやめることができなかったのです。そこで私はモルモン経をプ

レゼントしてくれた友人の奥さんに、どうしたらよいか尋ねました。すると彼女は、次のような話をしてくれました。

『私のある友人はコーヒーが好きでどうしてもやめることができませんでした。しかしバプテスマを受け教会の会員になるためには、どうしてもコーヒーをやめることが必要でした。そこでその友人は断食し、心から祈りました。翌朝起きて台所に立ってみると、その友人はコーヒーのにおいを嗅ぐだけでさえ気分が悪くなるほどでした。神はその友人の祈りに答え、友人を助けてくださり、バプテスマを受けることができたのです。あなたも神の力を願って、本当の祈りをしてごらんください。』

私はこの話を聞いて祈ることにしました。友人の言った通りに心から本当の祈りを捧げました。

『されば汝らはわが名によりてたえず、御父に祈らざるべからず。而して汝らが必ず受くと信じて、わが名によりて御父に乞い求むるものは、その正当なるものなる限り、すべて汝らに与

えらる。』(Ⅲニーフイ18:19-20)

私はそれから2週間余り、ショウコウ熱にかかって苦しみました。これは沖縄でも非常にめずらしい病気です。この病気がなおった時、私はタバコを断ち切れない思いがすっかりなくなり、すぐにでもバプテスマを受けたいと思いました。

しかし、もう一つの問題がありました。それは私の主人のことでした。主人もモルモン経を読み、それが真実であることをわかりかけていたようでしたが、主人には億万長者になるという夢があり、当時も仕事を3つ持っていました。その主人にとって、教会に入れば什分の一を払わなければならないということ、これはまさしく考えるのも嫌なことだったに違いありません。そこで友人は主人にも祈るようにと勧めました。けれども主人は、私が祈ったのち病気のために非常に苦しんだことを知っているで、『とんでもない。私は妻のような目に会いたくありません。とても祈ることはできません。』と答えました。

しかし主人はやがて祈らないではおさまらないような気持ちになり、祈りました。すると本当に信じられないことですが、主人は肺炎にかかってしまいました。そして、あれほどこの世の富からぬけきれないでいた主人が肺炎で入院している間にモルモン経を今一度真剣に読み返しました。そして証を得、霊につけるものを第一に置くことに決心しました。主人の病気がよくなると、私たち夫婦はバプテスマを受けました。そして会員として当然の義務である什分の一を納め、主の戒めに忠実に従い始めて程なく、主人は仕事上でも成功を得ました。什分の一を支払うことによる祝福を今私たちは受けています。」

私たちの証は試みられた後にもたらされる。真の証は信仰を試された後でないと得られない。

新年明けまして

おめでとうございます

一年の計は元旦にあり……
今年も多くの計画が立てられるでしょう。

各々が神様のすべての誠めに従う決意を固くするならば、私達自身の生活、そして愛する者たちの生活は如何に祝福されることでしょうか。さあ、今あなたは自分の望む新しい年を作ることができるのです。私達の努力次第で楽しい一年にもなれば不愉快な年にもなるのです。喜びと幸福をもたらす

幸せな家族生活を送ることもできるし、あるいは不幸と悲しみに満ちた生活にすることもできるのです。日々の仕事に良く励むこともできれば、怠ることもできます。教会の責任を一生けん命果すこともできれば、いいかげんにもできるのです。良い隣人にでも悪い隣人にもなり得るのです。法律に従うこともできれば、反抗することもできます。あなたの望むどの道でも自分で選ぶことができるのです。あなたの望む道が正確にやってくるでしょう。



私達すべてが福音にそって毎週家族の夕べを開き、毎朝晩家族の祈りをして、天父なる神様が毎日私達に与えて下さるすべての祝福に感謝しようではありませんか。日々福音にそって生活し、他の人にしてほしいと思うことを他の人々にもしてあげようではありませんか。他の言葉で言えば、私達に教えられているように福音にそって生活しようではありませんか。

私達が私達の望みの種をまく時に、その収穫が何であるかを知り決定するのです。さあ、来る新年と永遠への道のために幸福の種を植えることを決心しようではありませんか。

アボ伝道部長

日本東伝道部

モルモンと北海道開拓

—大隈文書紹介—

瀧沼 誠二

北海道の開拓移民にモルモン教徒を使おうとしたなどと言った
ら、びっくりされる方が多いと思う。またつくり話だなどと思われ
る方もおられると思う。

ところが、早稲田大学所蔵大隈文書（現在、複写したものが道央
編纂所にある）に、

1875年7月18日

閣下ノ従順ナル臣僕

チャーレス・ウ・レゼンドル

大日本皇帝陛下ノ大蔵卿・大隈重信閣下

として、時の大蔵大臣大隈重信公に北海道の開拓移民にモルモン
教徒を用いることを進言している事実があるのである。

1875年といえば、明治8年であるが、日本が長い鎖国の門戸を開い
て、近代国家としての一步を踏み出そうとしていた時に、北海道開拓
をモルモンの手にまかせようとする考えがあつて、しかもそれが明
治政府の中樞を占める大隈重信公に提言されたということは、きわ
めて興味深い。以下、その進言の内容を少し紹介してみたいと思う。

李仙得こと、レゼンドル氏については、まだ不明の点が多いが、

おそらく、当時明治政府がかかげた富国強兵の国策のために雇った
外人の一人であろう。彼は、最適の植民候補がいるとして、モルモ
ン教徒をあげているのである。

是ニ於テカ夫ノ蝦夷地植民ノ疑團ハ到底之ヲ釈解ス可カラサル
一大障礙ニ出会ヒタルカ如シ然ルニ此ニ一箇ノ幸ト謂フ可キハ
九州ヨリ合衆國ニ来住セン人民中ニテウター一部ニ住スル者ハ
独リ他ノ人民ト其景況ヲ異ニシテ蝦夷地植民ノ主眼ヲ達スル
ニ之ヲ用ヒ得可シ

ウターとは勿論（u t a h）のことであるが、なぜモルモン教徒
を用いるかといえば合衆國ノ領地内ニ於テ其社会ノ制度ヲ保持
スルニ付キ頻リニ抵抗ヲ受ケ之レカ為ニ常ニ危難ニ羅リテ其心ヲ
安スル能ハザル状態にあるということと、ウターノ人民ヲ悪ムト
雖モ日本ニ於テハ其疾悪ノ原因ニ感テ同ウスルノ要ナク且ツウター
ノ人民蝦夷地来住ヲ願フ時若シ之ヲ許サハ自國ノ為メ害ヲ生ス
可キ旨ヲ慮スルノ要ナク 加エウターノ人民ハ植民ノ業ヲ為サ
シムルニ付テハ自余ノ人民ニ勝レ>ているという点をあげている。

そして、このウターの人民について、きわめて詳細に以下説明し
ている。 即ち

其人民ハ万以上ニ及ヘル社中ヲ為シ其信奉スル法教ノ名「モ
ルモニスム」ニ依リ世人之ヲ称シテ「モルモン人」ト言ヘル

とし、わが教会の歴史を述べるのであるが、きわめて精密で正確
であることに、今読んでみても驚かざるをえない。

「さぎなみ」より抜粋

